

SLC

名古屋学芸大学
名古屋学芸大学短期大学部
Service Learning Center

vol. 01

あゆみ



名古屋学芸大学一名古屋学芸大学短期大学部
サービスラーニングセンター

もくじ

「あゆみ」の発刊によせて	名古屋学芸大学学長	杉浦 康夫	1
はじめに	SLセンター長	田村 明	2
1. 年譜			3
2. サービスラーニング (SL) センターの紹介			6
1) SL センターの理念			
2) 学内における SL センターの位置づけ			
3) SL センター運営委員会			
4) SL 活動の実践			
5) ボランティアを要請して下さる皆様方へ			
3. SL センターの活動状況			11
1) SL 登録状況			
(1) 2016 年度 SL 登録状況			
(2) 年度別新規登録者数			
2) SL 参加状況と活動報告			13
(1) SL 参加者数 (延べ人数)			
(2) SL 参加学生の体験報告 (抜粋)			
3) ボランティア要請件数と派遣件数			23
(1) 年度別ボランティア要請件数と派遣件数			
(2) 派遣要請にお応えできた SL の内容と件数			

4) SLセンター主催講習会	28
(1) 講習会の内容	
(2) 講習会の開催日時と受講者数	
(3) 学部別受講学生数	
5) 復興支援活動	30
(1) 復興支援インターン、復興・創生インターンおよび夏ボラとは	
(2) 復興支援インターンと復興・創生インターンおよび夏ボラ報告会開催実績	
4. SL活動の単位認定	34
5. SLセンター運営委員の思い	35
6. 参考資料（報告会用パネル、新聞等の掲載記事）	45

「あゆみ」の発刊によせて

名古屋学芸大学学長
杉浦 康夫

サービスラーニングセンターは2013年に構想され2014年7月に設立されました。日本のボランティア活動は1995年阪神淡路大震災の時、多くの人たちにより行われ、社会的にも注目を集めることになりました。2011年の東日本大震災でも大きな役割を果たしてきました。本学学生のボランティア活動をサービスラーニング活動とし、大学として取り組むことは、学生の学業の一環として、あるいは社会人として成長して行くための必須な活動としての位置づけをしたことであります。センターはボランティア活動をとおして、学生が様々な人と出会い、多様な経験ができる機会をサポートし、地域と学生と大学を繋ぐ要の機関であります。本学が学生と地域と共に新しい展開を始める第一歩が本センターの設立でした。

この2年半にわたるサービスラーニングセンターの活動は多岐に渡り、その活動内容は本誌に報告されています。歴史の年表と同様、記された事象と事象の間にも様々な出来事があり、思いがつかっています。晴れたからできたこと、雨が降って工夫したことなど全てが報告されていません。その一つ一つが学生を、教職員をそして本学をもう一段階上に成長させています。支えてくださった地域の皆さん、企業の皆さんに心より感謝を申し上げます。

私は学長就任に際し、「地域に学び、人と結び、人を支えて、世界にはばたく」というメッセージを出しました。学生や教職員の活動が大学を成長させるものです。そのために地域や人と結ぶことが、大学を大きく発展させると常々感じております。学生たちが地域の中で学ぶこと、人との繋がりを強くすること、人を支えることで、学生たちが世界のステージへと成長する、そんな夢を持っています。サービスラーニングセンターには、その架け橋としてこれからも重要な存在であり続けることを願います。

はじめに

SLセンター長
田村 明

「スペシャルオリンピックス実行委員会からボランティア学生の募集が来ているんですが、学生課に依頼したらいいですか？」同会の理事をしておられた井形前学長から、学生部長としての私への問い合わせでした。残念ながら、本学には学生ボランティアを管理する部署がありません。そこで井形先生のご意向もあり、至急ボランティアセンターを立ち上げることになりました。

センター立ち上げに際し、次の二つの事を考えました。

- ① 各学科の教員が構成員となる組織を立ち上げ、学科で学生ボランティアを推進して頂くこと。
- ② 学外から依頼されるボランティア要請を、学生が簡単に知ることができるようにすること。

①については、各学科よりセンター運営委員を選出して頂き、毎月運営委員会を開催することにより、全学的なセンターとして活動でき、かつ学生にボランティアの重要性を説いて頂けるようになりました。

②についてですが、依頼されているボランティアをセンター内にどれだけ掲示しても、学生が足りなくセンターに通うとは考えにくい。ならば何時でも何処でも、たとえ学外からでもボランティア要請を確認することができるようにと、ホームページ（HP）の充実を考えました。センター職員が、学生を派遣するのにふさわしいボランティア依頼であれば、即、HPにアップする形にしました。殆どの学生はスマホを持参していますので、いつでもボランティア要請の確認が可能となりました。この冊子をご覧頂いている皆様にも是非、HP (<http://slc.nakanishi.ac.jp>) をご覧頂きたいと思えます。

本学の建学の精神は、「人間教育と実学」です。「実学」とは、専門知識・技術を授け社会貢献できる人材養成と考えます。かたや「人間教育」を座学で培うことは難しく、それこそ相手があって初めて、人としてのあり方が培われるものと考えます。キャンパス外で見ず知らずの方たちに接し、ボランティア活動（サービス）をさせて頂くことによって、人としてのあり方を学ばせて頂きたい（ラーニング）。そのような願いから、センターの名称はサービスラーニング（SL）センターに決まりました。本学は、医療・福祉系（管理栄養学部、看護学部（2018年4月設置予定）、ヒューマンケア学部）から芸術系（メディア造形学部3学科）まで多岐に渡り、特色ある人材を養成しております。それぞれの分野で学び培った知識・技術をボランティアで発揮し、そこで新たな課題を見つけ、その課題を追求する姿こそ、「人間教育と実学」と信じます。

2014年7月に大学附置の組織としてセンターが立ち上がってから2年半が経とうとしています。この間、次ページ以降に示すように、たくさんのボランティア要請を頂きました。依頼して頂きました皆様方に心から御礼申し上げます。まだまだ発展途上のセンターですが、これからも学生のためになるボランティア活動を強力に推進していく所存です。どうぞ、今後ともよろしく願い申し上げます。

1. 年譜

2013 年度

- 12月 構想開始
- 2月 設立案完成
- 3月 評議会審議

2014 年度

- 5月 施設・設備案作成
- 6月 第一回 SL センター運営委員会開催（以後、毎月運営委員会を開催）
井形昭弘学長より激励
センターの名称決定
キャッチコピーの選定
規程の策定
- 7月 2日 開所式（レ・アール棟 2 階）
学外からのボランティア要請受付開始
学生が使用する SL 申し込み等の様式決定
- 9月 HP 準備開始（株式会社 A & A に作成依頼）
- 10月 HP のアドレス決定（<http://slc.nakanishi.ac.jp>）
- 25日 SL センター開設記念講演 名古屋第二赤十字病院 救急科部長 稲田眞治先生
「災害発生時の自助共助～災害医療の立場から考える」
- 31日 HP 運用開始
- 11月 13日 日本赤十字社愛知県支部と名古屋学芸大学間で連携協力協定締結
- 12月 センター職員 1 名着任
東北学院大学災害ボランティアステーションに加盟
- 1月 復興支援インターン参加学生 事前指導
- 3月 復興支援インターン参加（石巻市 7 名、亘・山元町 3 名）
仮設住宅（荻浜）での食事支援（管理栄養学部）

2015 年度

- 4月 SL センター紹介リーフレットを履修登録時に全学生に配布
ボランティアに関する単位認定科目「食と健康のフィールドワーク」が
管理栄養学部の新設
復興支援インターン報告会・パネル展示
- 5月 宿泊を伴う SL 活動（夏季キャンプ）の募集開始

- 6月 赤十字救急法短期講習
ネパール地震募金活動（義援金 3,899 円は日本赤十字社愛知県支部へ）
- 7月 赤十字健康生活支援法短期講習
- 8月 日進市民活動祭実行委員募集（企画・運営型長期ボランティア）
復興支援インターン参加（石巻市 4 名、南三陸町 4 名、気仙沼市 3 名）
仮設住宅（荻浜）での食事支援（管理栄養学部）
- 10月 復興支援インターン報告会・パネル展示
大学祭で復興支援インターン生によるインターン先商品を販売
（収益 19,452 円は東日本大震災義援金として日本赤十字社愛知県支部へ）
- 11月 赤十字健康生活支援法短期講習
- 12月 赤十字救急法短期講習
SL センター学生交流会（tea party）でインターン先商品を紹介
にっしん市民活動祭・にっしんハーモニーフェスタでインターン先商品を販売
（収益 16,094 円は東日本大震災義援金として日本赤十字社愛知県支部へ）
- 1月 メーリングリスト（slc_ml@nuas.ac.jp）を利用してボランティア要請に関する
運営委員間での情報共有化
学びに繋がる有償ボランティア募集開始
- 3月 復興支援インターン参加（石巻市 2 名、南三陸町 4 名、気仙沼市 4 名）
仮設住宅（荻浜）での食事支援（管理栄養学部）
赤十字救急法救急員養成講習（資格支援）
- 2016 年度
- 4月 履修登録時に SL センター紹介リーフレット配布、PP を活用して全学生に
SL 活動の啓発
熊本地震募金活動（義援金 6,155 円は日本赤十字社愛知県支部へ）
- 5月 復興支援インターン報告会・パネル展示
農林水産省東海農政局とコラボレーションボランティア開始
- 6月 赤十字救急法短期講習
学びに繋がる企業ボランティア募集開始
農林水産省東海農政局パネル展示（6月17日～6月30日）
- 7月 赤十字健康生活支援法短期講習
- 8月 震災を題材にしたインターン学生による絵本の製作
東北学院大学主催の夏休みボランティア（夏ボラ）に参加（気仙沼 1 名）
仮設住宅（荻浜）での食事支援（管理栄養学部）
- 9月 復興・創生インターン参加（石巻市 2 名、管理栄養学部で初めて単位認定）
日進市社会福祉協議会とコラボレーションボランティア開始

- 赤十字救急法救急員養成講習（資格支援）
- 10月 大学祭で復興支援インターン生による提案メニュー食の販売
- 11月 あいち防災フェスタ（モリコロパーク）で復興支援インターン、復興・創生インターン、夏ボラ学生合同報告会
豊明市 HP に、学生作成の男女共同参画イラストを公開
- 12月 SLセンター学生交流会（tea party）で成果物の紹介
作成絵本の紹介と提案メニューの調理・試食
蜂蜜を使用したレシピを考案し、刈谷市商店街にて販売
- 1月 SLセンター主催講演会 名古屋産業大学教授 石橋健一先生
「地域とコミュニティ」
中部大学 松尾直規先生へコミュニティづくりのご相談
- 2月 新しい東北交流会 in 仙台で、介護食商品化までの過程を発表
「復興支援インターンから始まった介護食の商品化」
仮設住宅（荻浜）での最後の食事支援（管理栄養学部）
東海農政局主催「消費者等と東海農政局との懇談会」に学生2名出席

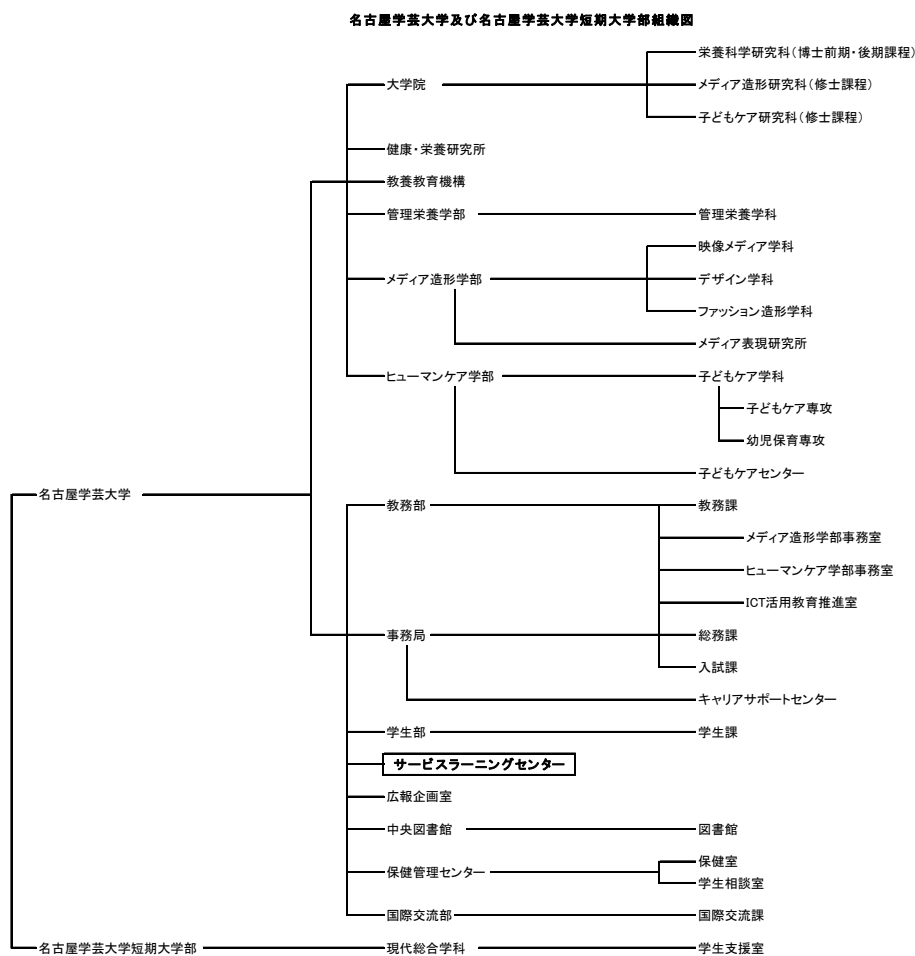
2. サービスラーニング (SL) センターの紹介

1) SL センターの理念

社会のデマンドに対応した社会活動（ボランティア活動）に学生が主体的に参画し、体験的学習を通じて建学の精神である「人間教育」の一助とする。

サービスラーニングセンターでは、必要とされるボランティア活動をさせていただくと同時に、学ばせて頂くという趣旨で、ボランティアセンターではなく、サービスラーニングセンターと名前が付けられています。

2) 学内における SL センターの位置づけ



短期大学部は2017年3月末で閉校となります。

3) SL センター運営委員会

下記教職員を構成員とし、毎月、センター運営委員会を開催している。審議内容は、依頼されたボランティア受諾の可否、センター主催のイベント、学生への啓発活動など、センター運営上必要とする事柄である。

表1 SLセンター運営委員

	2014年度	2015年度	2016年度
センター長	教授 田村 明		
管理栄養学科	講師 安達 内美子		准教授 安達 内美子
子どもケア学科	准教授 坂 恭子	准教授 渡辺 桜	准教授 石垣 儀郎
映像メディア学科	准教授 吉野 まり子		講師 柿沼 岳志
デザイン学科	准教授 中西 正明		
ファッション造形学科	准教授 金森 久宙		教授 炭釜 啓人 9月～ 准教授 鈴木 康明
短期大学部	講師 草野 圭一	准教授 伊藤 琴恵	
ボランティアコーディネーター	講師 石原 貴代		
学生課長	水野 康隆		
センター職員	花井 一都子		

4) SL 活動の実践

SLセンターホームページ（以下HP）のトップページを図1に、在学生が実際にボランティアを実施するまでの過程を図2に示す。



図1 SLセンターHPのトップページ (<http://slc.nakanishi.ac.jp>)

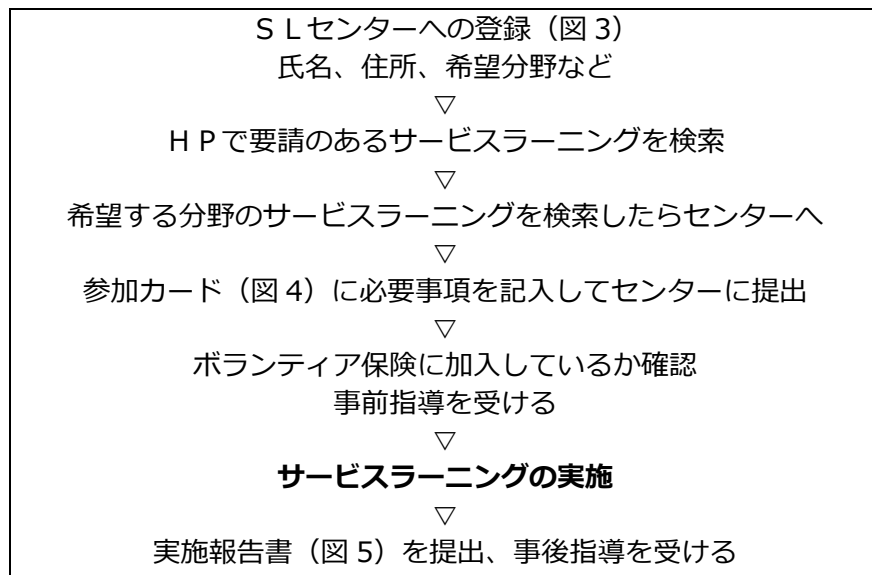


図2 SL活動実施までのながれ

<p style="text-align: right;">発行 年 月 日 #41</p> <p style="text-align: center;">SL登録カード</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td colspan="2">学年番号</td></tr> <tr><td colspan="2">ふり仮名 氏 名</td></tr> <tr><td colspan="2">姓 名</td></tr> <tr><td colspan="2">登録番号 () / 番号</td></tr> <tr><td colspan="2">メールアドレス</td></tr> <tr><td colspan="2">携帯アドレス:</td></tr> <tr><td>学部・学科</td><td>-</td></tr> <tr><td>専攻・コース</td><td>-</td></tr> </table> <p>サービスラーニングに関する考え</p> <p>サービスラーニング希望分野とその内容</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>性別・期間</td><td>メールアドレスの取得 希望する <input type="checkbox"/> 希望しない <input type="checkbox"/></td></tr> </table> <p style="font-size: small;">※学年番号を記入してください ※登録番号は、入学時に発行されるものです ※メールアドレスは、必ずしも必要ではありません。但し、登録カードに記入して後に印刷し、事務局まで送付する必要があります。 ※希望する分野は、SLセンターでの実施可能分野、事務局の担当者がいることでのみ受け付けられます。</p>	学年番号		ふり仮名 氏 名		姓 名		登録番号 () / 番号		メールアドレス		携帯アドレス:		学部・学科	-	専攻・コース	-	性別・期間	メールアドレスの取得 希望する <input type="checkbox"/> 希望しない <input type="checkbox"/>	<p style="text-align: right;">発行 年 月 日 #42</p> <p style="text-align: center;">SL参加カード</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td colspan="2">登録番号</td></tr> <tr><td>学年番号</td><td>ふり仮名</td></tr> <tr><td>姓 名</td><td></td></tr> <tr><td>登録番号</td><td>メールアドレス</td></tr> <tr><td colspan="2">学部・学科・専攻・コース</td></tr> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>学生新聞発行 公益促進</td><td>加入</td><td>申込 氏名</td></tr> <tr><td>学生新聞研究 会誌発行</td><td>加入・未 加入</td><td>性別</td></tr> <tr><td>ボランティア 保険</td><td>加入・未 加入 (未加入の場合)</td><td>性別</td></tr> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td colspan="2">SL 氏の名前</td></tr> <tr><td colspan="2">姓 名</td></tr> <tr><td colspan="2">SL 氏の名前</td></tr> <tr><td colspan="2">姓 名</td></tr> <tr><td colspan="2">自宅からの所属機関</td></tr> <tr><td colspan="2">希望日時</td></tr> <tr><td colspan="2">事前説明日 日時 (月 日)</td></tr> </table> <p style="font-size: x-small;">※事務局まで送付する際は、必ず「希望する実施日」を必ず一箇所記入してください ※ボランティア保険は、必ずしも必要ではありません。但し、登録カードに記入して後に印刷し、事務局まで送付する必要があります。 ※希望する分野は、SLセンターでの実施可能分野、事務局の担当者がいることでのみ受け付けられます。</p>	登録番号		学年番号	ふり仮名	姓 名		登録番号	メールアドレス	学部・学科・専攻・コース		学生新聞発行 公益促進	加入	申込 氏名	学生新聞研究 会誌発行	加入・未 加入	性別	ボランティア 保険	加入・未 加入 (未加入の場合)	性別	SL 氏の名前		姓 名		SL 氏の名前		姓 名		自宅からの所属機関		希望日時		事前説明日 日時 (月 日)		<p style="text-align: right;">発行 年 月 日 #43</p> <p style="text-align: center;">SL実施報告書</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td colspan="2">学部・学科・専攻・コース</td></tr> <tr><td colspan="2">登録番号</td></tr> <tr><td colspan="2">学年番号</td></tr> <tr><td colspan="2">ふり仮名</td></tr> <tr><td colspan="2">姓 名</td></tr> <tr><td colspan="2">登録番号</td></tr> <tr><td colspan="2">メールアドレス</td></tr> <tr><td colspan="2">携帯アドレス</td></tr> <tr><td colspan="2">自宅からの所属機関</td></tr> <tr><td colspan="2">希望日時</td></tr> </table> <p>SL 内容 (実施した内容・説明との違い)</p> <p>SL 行っている感想 (良かったこと・学んでこと、思ったこと・知らなかったことなど)</p> <p>次回参加希望へのアドバイス (感想・希望した方がいいもの)</p> <p>今後について SL 内容</p> <p style="font-size: x-small;">※必ずしも記入しなくても構いません 但し、事務局まで送付の際は、必ず「希望する実施日」を必ず一箇所記入してください ※ボランティア保険は、必ずしも必要ではありません。但し、登録カードに記入して後に印刷し、事務局まで送付する必要があります。 ※希望する分野は、SLセンターでの実施可能分野、事務局の担当者がいることでのみ受け付けられます。</p>	学部・学科・専攻・コース		登録番号		学年番号		ふり仮名		姓 名		登録番号		メールアドレス		携帯アドレス		自宅からの所属機関		希望日時	
学年番号																																																																									
ふり仮名 氏 名																																																																									
姓 名																																																																									
登録番号 () / 番号																																																																									
メールアドレス																																																																									
携帯アドレス:																																																																									
学部・学科	-																																																																								
専攻・コース	-																																																																								
性別・期間	メールアドレスの取得 希望する <input type="checkbox"/> 希望しない <input type="checkbox"/>																																																																								
登録番号																																																																									
学年番号	ふり仮名																																																																								
姓 名																																																																									
登録番号	メールアドレス																																																																								
学部・学科・専攻・コース																																																																									
学生新聞発行 公益促進	加入	申込 氏名																																																																							
学生新聞研究 会誌発行	加入・未 加入	性別																																																																							
ボランティア 保険	加入・未 加入 (未加入の場合)	性別																																																																							
SL 氏の名前																																																																									
姓 名																																																																									
SL 氏の名前																																																																									
姓 名																																																																									
自宅からの所属機関																																																																									
希望日時																																																																									
事前説明日 日時 (月 日)																																																																									
学部・学科・専攻・コース																																																																									
登録番号																																																																									
学年番号																																																																									
ふり仮名																																																																									
姓 名																																																																									
登録番号																																																																									
メールアドレス																																																																									
携帯アドレス																																																																									
自宅からの所属機関																																																																									
希望日時																																																																									

図3 SL登録カード

図4 SL参加カード

図5 SL実施報告書

SL活動開始時及び活動中の注意事項

- 大学の授業や私生活などに支障がでないように、スケジュールを自己管理しましょう。
- 自分の創意工夫を生かせるところは引っ込み思案にならず提案しましょう。
- 引き受けたことは責任を持って最後までやりとげましょう。

- 活動する場の皆さんが気持ちよく参加できるように、挨拶はもちろんのこと、明るく、自ら進んで活動しましょう。
- 活動にふさわしい服装で、アクセサリーや派手な化粧は慎みましょう。
- 相手の立場にたって考え、行動しましょう。
- 活動日にやむを得ず休む場合は、活動先と SL センターに連絡しましょう。
- 活動中の内容には守秘義務がある場合があるので、活動後の言動に気を付けましょう。
- 活動先の施設・設備や人を傷付けた場合、あるいは自分が怪我を負った場合は速やかに施設の方および SL センターまで申し出てください。
- むやみに写真撮影したり、写真や文章をツイッターなどの SNS へ投稿しないでください。

5) ボランティアを要請して下さる皆様方へ

SL センターでは皆様方からのボランティア要請をお待ちしております。具体的な依頼方法を図 6 に示します。

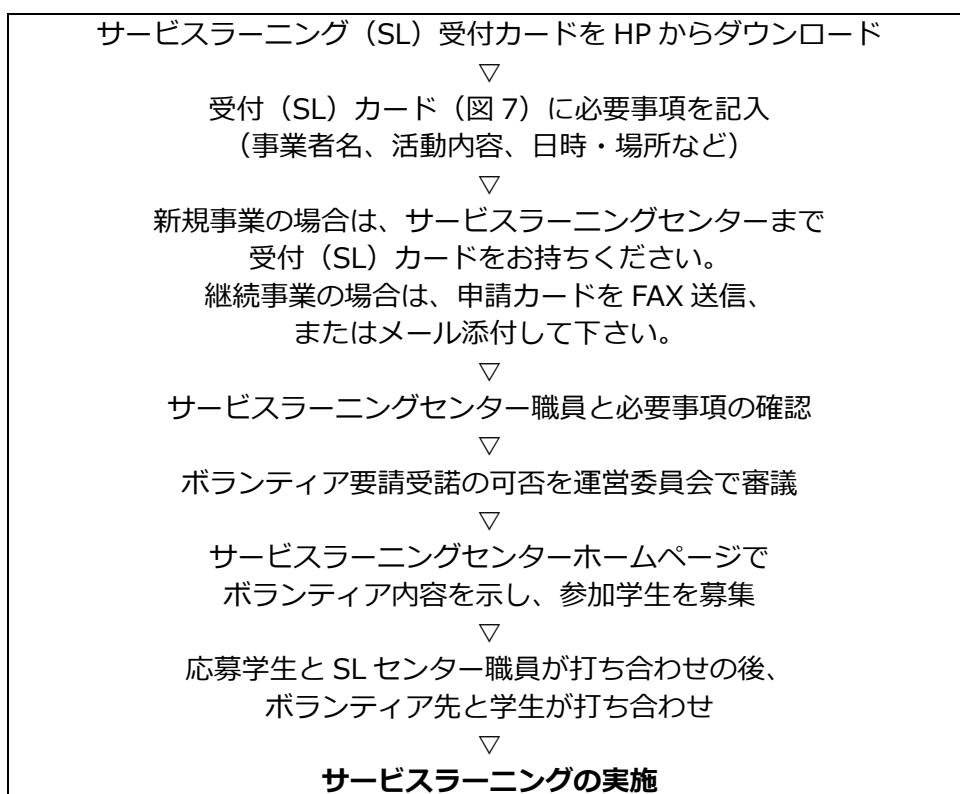


図 6 ボランティア要請のながれ

本学園の建学の精神は、「人間教育と実学」です。「人間教育」は座学だけで培うことができず、皆様方と接触することによって初めて身に付くものと考えます。学園には、実学として、栄養、映像、デザイン、ファッション、養護教諭、子ども心理、幼児保育など、多岐多彩な分野を専攻している学生がいます。これらの学生に、人間としてより大きく成長するための機会を与えて下さい。センターでは皆様方からのご連絡をお待ちしています。

捺 印		
--------	--	--

受付 年 月 日 様式 4

サービスラーニング受付カード

名古屋学芸大学・名古屋学芸大学短期大学部
SLセンター長 殿

下記 SL センター申し合わせ事項を厳守いたしますので、次の内容で貴学の学生サービスラーニングの派遣をお願いします。

申し込み日 年 月 日
事業者名 _____
ご担当 職・氏名 _____

SL センター申し合わせ事項

- 個人情報保護法に基づき、学生の個人情報は聞かない・漏えいしない。
- ・学生の個人情報を知りえた場合は、この受付カードの活動に限りの使用とする。
- 依頼内容のボランティアに限り、学生に活動させる。
- 学生への安全配慮を行う。
- 急な変更等は SL センターに速やかに連絡する。
- 活動における著作権は、SL センターの同意なしに使用しない。
- ・活動における著作権のうち、創作活動（デザイン・映像・作品・作品の写真・文章など）については、SL 受付時に協議することを基本とするが、本学の学生の教育推進活動の結果であり、営利目的で使用しないこと、加えて、名古屋学芸大学学生が作成したことを作品等に付することを基本とする。
- ・記録写真に残る肖像権や報告等に用いた写真や文章についても、創作活動と同じとする。

確認者署名 _____
所属・氏名 _____

依頼内容

事業者名				
部門				
所在地 連絡先	住所			
	Tel・FAX・ホームページ URL			
ご担当窓口 職・お名前・連絡先	職		お名前	
	連絡先 Tel	E-mail		
活動内容 詳しく				
日時・場所	年 月 日 () ~	集合場所：		
	年 月 日 ()	実施場所：		
希望 (添えない場合もあります)	派遣人数	学部・学科等	男 女	持ち物
	その他 特記すべき事項			

(紹介者 _____)

※荒天時対応・募集状況の選択の確認の必要等は他の欄にご記入ください。
※お申し込みは、直接 SL センター窓口でお申し込みください。

図 7 SL 受付カード

3. SL センターの活動状況

1) SL 登録状況

(1) 2016 年度 SL 登録状況

ボランティア活動をするには、まず SL センターにボランティア希望分野や住所・氏名などを登録する仕組みになっている。2016 年度に在籍する学生が、どの程度センターに SL(ボランティア) 登録しているかを表 2 に示す。センターは 2014 年 7 月に開設されたが、以来、常時登録を受け付けている。センター開設年度に 2 年生だった学生は、表 2 では 4 年生に該当する。したがって登録した学生のうち、2014 年度に 3 年生、4 年生であった学生は、卒業しているのでこの表にカウントされていない。在籍者総数 (2816 名) に対し、登録している学生は 650 名であり、およそ 23% の学生がボランティア登録している。

表 2 学部学科学年別 SL 登録者数

2017年1月31日現在

学部	学科	学年	在籍者数 (名)	登録者数 (名)	在籍者に対する 登録者の割合(%)
管理栄養学部	管理栄養学科	4年生	174	87	50
		3年生	174	79	45
		2年生	177	99	56
		1年生	172	75	44
ヒューマンケア学部	子どもケア学科	4年生	238	22	9
		3年生	236	53	22
		2年生	225	88	39
		1年生	239	104	44
メディア造形学部	映像メディア学科	4年生	118	7	6
		3年生	109	5	5
		2年生	122	5	4
		1年生	121	2	2
	デザイン学科	4年生	69	3	4
		3年生	90	7	8
		2年生	76	5	7
		1年生	96	5	5
	ファッション造形学科	1~4年生	309	0	0
短期大学部	現代総合学科	2年生	71	4	6
		合計	2816	650	23

表 2 の結果をもとに、全学生の学科別在籍割合と、全登録者数に占める学科別登録者の割合をそれぞれ、図 8 と図 9 に示す。子どもケア学科に所属する学生は、5 学科中で最も多く 33%、次いで管理栄養学科 25%、映像メディア学科 17%となっている（図 8）。一方、全登録者数に占める各学科の登録割合を見ると、管理栄養学科では 52%、次いで子どもケア学科 41%であり、SL 登録者の 93%は、この二つの学科の学生であった（図 9）。映像メディア学科、デザイン学科、ファッション造形学科の学生は殆ど登録していなかった。長い歴史を持つ短期大学部は 2016 年度を持って閉校することから、現代総合学科に所属する学生の割合も（図 8）、ボランティア登録する学生の割合も少なかった（図 9）。

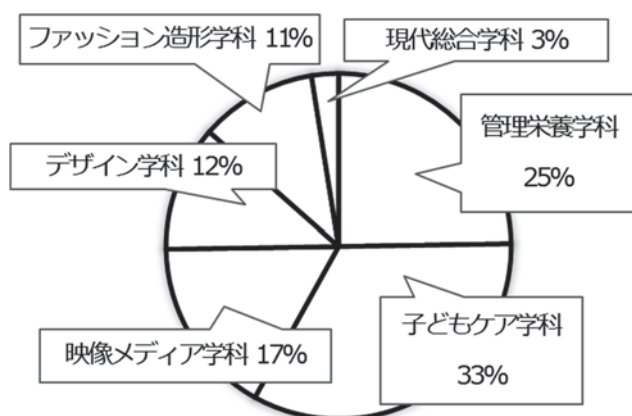


図 8 学科別在籍割合

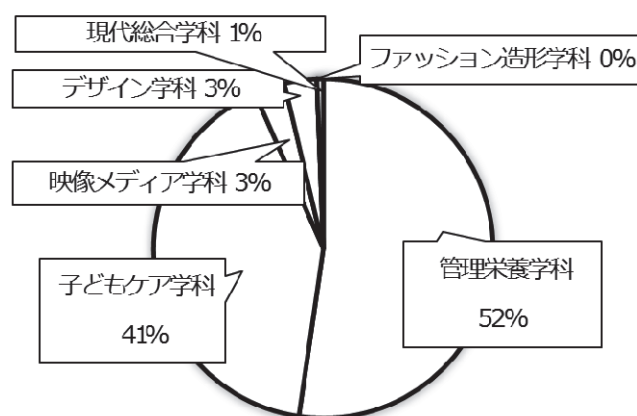


図 9 学科別 SL 登録割合

(2) 年度別新規登録者数

センター開設以来の年度別登録者数を表 3 に示す。2014 年度はわずか 29 名であったが、2015 年度に新規登録したものは 387 名に達した。2016 年度は 252 名に低下したものの、SL センターの存在が、学生間に浸透しつつあると思われる。

表 3 年度別新規登録者数

	2014年度(7.2~3.31)	2015年度(4.1~3.31)	2016年度(4.1~1.31)
登録者	29名	387名	252名

※表 2 の登録者数の合計には、卒業生を含んでいないため、表 3 の合計とは一致しません。

2) SL 参加状況と活動報告

(1) SL 参加者数 (延べ人数)

センター開設時から 2017 年 1 月末までの学科、学年、年度別 SL 参加状況を表 4 に示す。活動の中心になったのは、管理栄養学科と子どもケアに所属する学生であり、約 3 年間で管理栄養学科学生は 262 名、子どもケア学科の学生は 110 名、メディア造形学部の学生は 28 名であった。いずれも 4 年生になってからの活動は少なく、3 年生以下が主体であった。4 年生になると、卒業研究や就職活動が本格化するからであると考えられる。

2015 年度管理栄養学科 3 年生の SL 参加数は 84 名と突出しているが、主な SL 場所・活動は、石巻市荻浜地区の仮設住宅における食事提供 (38 名)、国立長寿医療研究センター主催イベント (14 名)、にしん市民活動祭実行委員 (5 名)、復興支援インターン (4 名)、伊那谷こども村主催のサマーキャンプ (5 名) 等であった。

SL 活動に参加するとその楽しさやその価値を実感するらしい。そのため、何度も参加する学生がおり、表 4 の中には、5 回も参加している学生もいることから、表の参加者数は延べ数で表している。

表 4 学部学科学年年度別 SL 参加者数

2017年1月31日現在

学部	学科	学年	2014年度	2015年度	2016年度
管理栄養学部	管理栄養学科	4年生	0	0	5
		3年生	3	84	37
		2年生	9	25	31
		1年生	7	43	18
ヒューマンケア学部	子どもケア学科	4年生	0	2	3
		3年生	7	4	8
		2年生	0	19	13
		1年生	1	37	16
メディア造形学部	映像メディア学科	4年生	0	0	1
		3年生	0	9	0
		2年生	0	1	0
		1年生	0	2	1
	デザイン学科	4年生	0	0	3
		3年生	0	0	4
		2年生	0	3	0
1年生	0	0	4		
ファッション造形学科	1~4年生	0	0	0	
短期大学部	現代総合学科	2年生	0	3	0
		1年生	2	4	
		合計	29名	236名	144名

2015年度および2016年度の学科別SL参加者割合を、それぞれ図10、図11に示す。管理栄養学科と子どもケア学科は2年間で大きな変動がなく、管理栄養学科は64~63%、子どもケア学科は26~28%であった。メディア造形学部の3学科は0~8%程度であった。

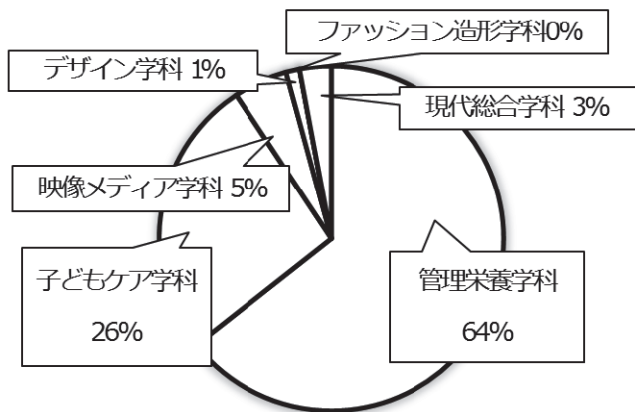


図10 2015年度の学科別SL参加割合

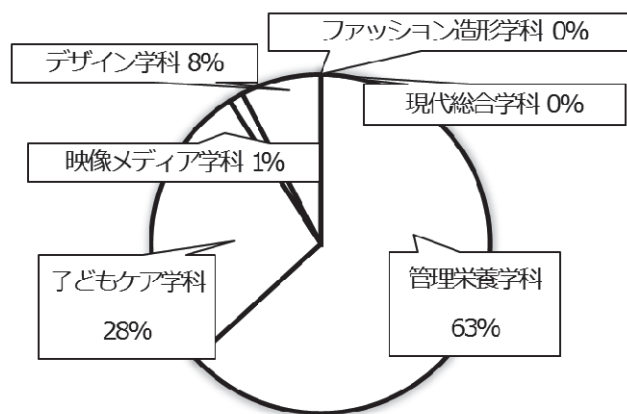


図11 2016年の学科別SL参加割合

(2) S L 参加学生の体験報告 (抜粋)

社会福祉 (高齢者・障がい者・子ども等)

障がい者クリスマス会： 子どもケア学科・養護教諭コース 1年 中野 優菜

障がいを持った人たちはとても元気で、一緒になって歌ったり踊ったりすることができて楽しく過ごせました。はじめは何をしていいかわからず、戸惑ってしまいましたが、指示を待つだけでなく、自分から動いて積極的に参加することができたと思います。どうしたら相手に分かりやすく思いを伝えられるかを常に考え、大きな声でゆっくりと話したり、発音を意識したり、相手の立場に立って言動することの重要性を改めて学ぶことができたと思います。

高齢者施設 秋祭り： 管理栄養学科 3年 古川 愛美

今回、私は初めて特別養護老人ホームに行き、高齢者の方と触れ合いました。ボランティアの作業内容は、とても簡単なもので、担当の方がていねいに教えて下さったため、困る事は特にありませんでした。今回の祭りは、認知症をもつ方のフロアであったため、少し不安もありましたが利用者の方は私にも話しかけてくださりました。また、介護職員の方ともお話しをし、施設のことを教えて頂きました。栄養士の先生とも、お話しをすることができ、施設の食事についてや、厨房の見学もさせていただきました。臨地実習前にとってもいい経験になりました。

子ども祭りのお手伝い： 子どもケア学科・幼児保育専攻 2年 松原 由加里

普段学校などでは0~5歳の子どもの関わることがほとんどで、小学生以上の子と関わることがひさしぶりだったので、始めはどう接していいかわかりませんでしたが、みんな元気にたくさん話しかけてくれたので、とても楽しくできました。私がお手伝いしたのは紙コップを積んでタワーを作り、みんなでひとつの作品を作ろうというブースでした。小さい子はゆっくりと床に紙コップを積んで楽しんだり、小学生は自分の背より大きなタワーに挑戦して、倒れてしまってもあきらめず何度も挑戦する姿を見て、すごいなと思いました。子どもの発想ややる気でとても大きな作品になって、見ていた私もとても楽しかったです。

夢まつり： 子どもケア学科・養護教諭コース 1年 松浦 笑

大学の講義で、社会福祉や障がいについての勉強をしていますが、障がいのある方と関わったことがなく、実際に触れ合うことでより障がいについて理解を深めたいと思い、ボランティアに参加しました。施設の方のお話によると、利用者の高齢化・重度化により、どうしても介護の方に時間を費やすことになってしまい、余暇を一緒に楽しむボランティアを必要としているということでした。今回のボランティアでは主に屋台の手伝いで、実際に利用者とお話をしたりすることはできませんでしたが、このようなボランティアを必要とされている方がいるのがわかりました。また、夢の家に行って、利用者とお話しをしたり、できることをお手伝いしようと思いました。

宿題ボランティア： 管理栄養学科 2年 石川 亜由美

はじめてボランティアを行いました。自分が小学生だったころを思い出したように懐かしく、とても可愛かったです。自ら進んで勉強しに来る子がとても多くて驚きました。私はポスターや日記を進めるコーナーを担当しました。たくさん来る子に自分から話しかけて、どんなものを書くのか、思い出を聞き出しながら、絵を進めることが難しかったけれど、話していくうちに「お姉さん！」と無邪気に思い出を私に話してくれて、私自身楽しみながらできました。「この絵が描けない！」という子に対して困っていると、地域の方が一緒に図書館に行って見てみよう！」と言っているのを聞いて、私も真似して取り入れたりしました。仲良くなった女の子が余った時間で私に絵を書いて嬉しかったです。小さい子との関わりを通して、教える事の難しさを改めて感じました。またボランティアをして色々な力を身に付けていきたいなあと思います。

小学校での防音作業： 子どもケア学科・養護教諭コース 1年 鹿野 文香

担当の先生から色々なお話を聞かせて頂きました。また、自分の将来のことに対してアドバイスをして頂けたり、先生自身が子どもたちに授業をする際に気を付けていること、その小学校独特の行事等も教えて頂きました。難聴の子のために、いすと机にテニスボールをはめているということとを今回ボランティアに行くまで知りませんでした。実際にテニスボールに切り込みをいれる作業をして、先生方がその他の仕事のあい間を縫ってこのような力のいる準備をしてみえるなんてすごいと思いました。通常学級に障がいを持つ子が入るということは子ども達にとってメリットがたくさんあると思いました。しかし、教師の立場からしたらたくさんの方に気を配らなければならない、簡単なことではないのだなと感じました。多くのことを考えることができました。経験できて良かったです。

環境保全（自然保護・清掃・美化等）**清掃活動： 学生会**

清掃活動を行いました。地域住民の方と学生が二人一組になって活動をする光景もあり、地域の方々と学生が交流する貴重な機会となりました。また、役員や組長の方と交流をはかれたことから今後の竹の山地域のみなさんとの交流の機会にも繋がる期待を持つことができました。参加者の皆さんからは感謝の言葉や「今後も継続的にこのような交流をしていきたい」という声が聞かれました。学生会としても清掃活動などを通し、地域住民の方々との交流を深めていきたいという言葉も聞けました。30℃を超える猛暑の中でしたが、とてもいい経験になりました。

文化交流（芸術・スポーツ・通訳等）

市民祭り 記録： 映像メディア学科 3年 神山 莉沙

私たちは主催者側の方との打ち合わせや会場下見などを経て、当日は撮影6名とメモリアルムービー編集2名の計8名で務めさせて頂きました。私は主にオープニングセレモニーと「華麗なる加齢なファッションショー」の撮影を担当したのですが、普段の撮影とは違い大勢の方がいる場での撮影だったため、いつも以上に周囲の状況やカメラの設置方法などに気を配る必要がありました。引きと寄りの画のメリハリがつけられなかったり、一発本番だったため出演者の方の動きにカメラがついていけなかったことなど反省する点多々ありました。他のブースでの撮影では出店者側の方を中心に撮ることを心がけました。中には恥ずかしがる方もおられましたが、多くの方が笑顔で手を振って下さったり商品のPRをして下さるなど、皆さんのご協力のおかげにより無事に撮影を終えることができました。

国際交流 誘導： 管理栄養学科 1年 荒川 智美

ボランティアの前日に当日の流れを説明してもらいましたが、正直、当日にうまく審査員の方を誘導できるか不安でした。ですが、当日になるとリーダーやボランティアの人たちの支えがあり、自分の役割を果たすことができよかったです。また、一緒にボランティアをした人たちは気さくでおもしろい人たちばかりだったので、楽しんでボランティアをすることができました。私は、今回、初めてボランティアを体験しましたが、思っていたよりも楽しかったので、また機会があればやりたいと思います。

移動消費者の家： 子どもケア学科・養護教諭コース 2年 太田 真帆

このボランティアに参加して、主に2点のことに気づかされました。1つ目は、社会人の仕事に対する本気の気持ちです。こちらはボランティアという軽い気持ちで参加していました。しかし、農政局の方はそのような人に対しても真剣にどのように改善したらよいか学生の目線で考えてほしい、と話されました。農政局のことをより多くの人に知ってもらい興味を持ってもらうにはどうしたらよいか本気で良くしようと考えておられることが伝わってきました。このことは他のボランティアでは味わえなかったことだと思います。そして2つ目は、今学校で学んでいることをしっかりと自分のものにしなければならないということです。今回のボランティアは養護教諭の仕事とは直接関係ありません。しかし子どもに対してどうすれば分かりやすく伝わるか、ブースの前を通る人に興味をもたせるにはどうしたらよいかなど今学校で学んでいることで役に立ちそうなものがあればぜひ教えてほしいといわれて、自分が学んでいたことでしっかりと教えられることはあるだろうかと悩んでしまいました。その時、今まで学んできたことは、直接関係することでもなく、いろんなところで活用することができることに気づき、学校で学んでいる以上、活用すべき時に発揮できなければ意味がないと分かりました。今回のボランティアは私にとって大切なことを教えてもらい、とても良い体験ができました。今回の気づきを今後活かしていきたいと思います。

夏休み子ども歴史教室 学生ボランティア： 子どもケア学科・幼児保育専攻 1年 平林 鈴風

ボランティアを開始して、一番初めに困ったこと、反省したことは、美術館のどこに何があるのか自分たちが全く把握していなかったことです。クイズに参加された子どもの保護者に展示の場所を聞かれたのですが、答えられず、全体をおおまかにでも把握しておくべきだと反省しました。次、聞かれたらすぐ答えられるように急いで案内図を取りに行きました。自分たちはボランティアでもお客さんから見れば学芸員と同じように見られているということに気付きました。また、今回このボランティアに参加した理由は、子どもと関わるためだったのですが、たくさんの子どもたちと触れ合うことができたので良かったです。そして美術館が予想以上に沢山のボランティアの方たちで成り立っていることに驚きました。

あいちトリエンナーレ： 映像メディア学科 1年 岡元 美那海

私はあいちトリエンナーレが開催された初めての年にお客さんとして参加しました。そのときからボランティアとして参加してみたいと思い、今回参加しました。さまざまな年代の人とお話出来たので良い経験になりました。作品についてもパンフレットに載っていなかったことを知れたり、展示場所を知れたり、作品の素材を知れたり、いろいろ知れたのでとても勉強になりました。

安全防災（安全対策・防災活動・災害等）

救急法短期講習： 管理栄養学科 3年 刑部 友菜

心停止している人を目の前にしたときに、どのように行動してよいか理解できた。小学生のころから、私たちの世代はこういった救急法について指導を受けてきましたが、そのおかげであわてることなく次に何をしたらよいかわかるようになったので、このような場面にあうことがあれば逃げずに対応したいと思います。学校での講義、免許取得の際にもやったので、大学生になってからは3回の救急法でしたが、やればやるだけ頭に入るので、今回も参加できてよかったです。

荻浜食事提供： 管理栄養学科 3年 神村 美帆

約1週間、仮設住宅に泊まりこんで毎日食事を作るのはもちろん楽しかったですが、大変な部分も多かった。しかし、現地の方々と沢山お話しをしたり、朝にはラジオ体操をしたり、ここでしか体験できない思い出を得ることができて嬉しかった。また、引率の先生が現地視察でいろいろな所に連れて行って下さったのでたくさんものを見る事ができた。改めて津波の恐ろしさを実感したのと共に、復興までまだまだ道のりは長いことを考えさせられた。今回のボランティアで一番印象に残っているのは、人々の心の傷である。以前、石巻でお話しを聞いた時よりも、陸前高田で語り部さんのお話しを聞いた時よりも強烈に感じた。これからも支援を続けていくのに加え、名古屋でも防災意識を高めていく必要性を強く感じたボランティアでした。

赤十字健康生活支援法短期講習会： 子どもケア学科・養護教諭コース 1年 足立 知奈津

高齢者の気持ちになって、筋肉をできるだけ使わない起き方や立ち上がり方を考えることは難し

かった。介護時これをさっとやれば、高齢者は喜ぶと思った。また風呂敷は様々な用途に使うことができるとは知っていたが、被災地などでの貴重品入れなどのリュックを作ることができた。普段使わないけれど、たった風呂敷二枚で完成し、かさばらないため、防災バックなどに入れておくと万能だと思った。タオルや手を使ってのリラクゼーションも学んだが、いつでも誰でもできるので良かった。冊子もあり復習可能で良かった。

赤十字救急法救急員養成講習会： 子どもケア学科・養護教諭コース 1年 青山 彩花

赤十字救急法救急員養成講習会に参加し、一番学んだことは非常時に落ち着いて判断し、行動できる力をつけることが一番大切だということです。止血の方法や骨折の固定の仕方、搬送方法、心肺蘇生法、気道異物除去など知識や技術を教えて頂き、とても良かったです。しかし、実践力はついていないと感じました。災害時のコミュニケーションの取り方を学んでいたとき、そのことを痛感しました。知識や技術を持っていても、実際にやるとなるとどういうときに何をするのか？何をしたらいいのか判断することが難しく、シミュレーションといっても傷病者を速やかに手当し、助けることが出来ませんでした。このことから私は、今まで知らなかった救急法の知識や技術を日常に活かしていくことで自分の身にしていこうと思いました。その時限りにするのではなく、今回学ばせていただいた救急の心得を忘れることなく、生活の中で今回学ばせて頂いた力が必要だとなったとき落ち着いて速やかに行動し、きちんとした手当や助けができるようにしたいです。

健康支援（食育・献血・健康相談等）

認知症研修会： 管理栄養学科 3年 林 千夏

多くの方が参加されていて、認知症の課題について多くの人に関心を持っていることを知った。"地域支え合い活動"や商店街の活動など様々な取り組みがされていることを知った。特に"地域支え合い活動"の話は興味深く、交流ができる場の提供や通院の支援など親身になって支えていて、とても素晴らしい支援だと思った。また、そういった支援は信頼感がないと行えないことから、日頃から地域交流を積極的に行っていく必要があることを学んだ。「互恵ケア」という言葉も印象的で、全ての人が平等に支援を受けるのではなく、その人に必要な分を支援することで平等にするといった考えが、今後様々な人に広まっていけばいいなと思いました。休憩中にインタビューをすることで、参加者の方の貴重な意見を聞かせて頂くことができ良かった。

東海農政局“移動諸費者の部屋”： 管理栄養学科 4年 大平 真那

2回目の参加でした。前はほとんど見に来てくれた方との交流は無かったが、今回はクイズがあったため、簡単な説明等関わる機会がありました。普段の展示では近寄ってきてもらえるように積極的に呼びかけたり、見ている方に声掛けは行わないそうです。そのため、如何に展示物で目を引くことができるかが大切だと感じました。今回のアイキャッチは私達からもアイデアを募集したものでしたが、自分で考えてみてぐっと引き付けられるような一言を考えるのは難しいなと実感しました。また、実際に使われたアイキャッチを見て、文字を大きくするためできるだけシンプルでかつ内容の要点をつかんでまとめる事が必要だと分かりました。今回の展示の閲覧者数は200人を超えたそうです。この人数も内容や季節によって大きく変動するらしく驚きました。

地域活動（まちづくり・地域イベント・観光案内等）

地域夏祭り： 管理栄養学科 1年 金子 みなみ

夏まつりの実行委員として、地域の自治会の方たちと一緒に企画から進めていきました。企画の段階では、自治会の方々にひっぱってってもらった感じでしたが、みなさんととても優しく、私たちが企画案で躓いたときもいくつも助言してくれました。当日は、私はステージ進行のアナウンスト、子どもたちとの参加型企画であるジャンケン大会の進行を務めました。ひとことで言うと楽

しかったです。子どもたちと触れ合うことができたし、出演者としても裏方としても"仕事しているなあ"って感じがして達成感もありました。当日、ちょっとしたハプニングもありましたが、学生たちで協力し合ってなんとかのりきることができました。私としては浴衣を着てやれたこともいい思い出です。最後には自治会の方々から感謝の言葉もいただき、改めて参加してよかったと思いました。来年もこのボランティアがあればぜひとも参加したいと思っています。

愛フェス： 管理栄養学科 1年 内藤 綾音

今回初めてイベントスタッフのボランティアに参加しました。初めは、知らない人ばかりでとても緊張して、動きもすばやくできませんでしたが、すぐ慣れて、自分で考えて行動する事ができました。ステージの担当だったのでボランティアや係の人以外に出演者さんともかかわることができて、とても楽しかったし、どうコミュニケーションをとればいいのか考えることができたので良い勉強になりました。機材を運んだ際にお礼を言われたときに、このボランティアに参加して良かったと思いました。ボランティアの人達は幅広い年齢層で構成されているので、とても勉強になりました。また違うボランティアにも参加したいと思います。

広報市民スタッフ： 映像メディア学科 4年 神山 莉沙

最初に面接で日進市役所を訪れた時から大変難しそうな内容だと思っていましたが、今まで勉強してきたカメラの技術を生かしつつ市民の方々に日進市のイベントの様子をお伝えできればと考え、市民スタッフの活動をさせて頂くこととなりました。最初の取材は愛知学院大学でのロースクール教室でした。市役所の方について回り、取材のことを教えて頂いたのですが、初めは何をして良いか分かりませんでした。また後日、記事についても書き方が分からず、提出して返ってきた記事にはたくさんの赤字の訂正が入れていました。普段書いている文章とは違い市役所が公式に掲載するものなので、当然制約も厳しくなりますし言葉の使い方が違っていたら大問題になります。広報市民スタッフを始めてからは文章を書く際に言葉の取舍選択や言葉の意味などを考えるようになり、大変勉強になります。写真の撮り方も市民の方々が見やすいように工夫をし続け、皆さんが読んでいて分かりやすく楽しいと思ってくれる記事作りを目指していきたいと思っています。

マラソンフェスティバル： 子どもケア学科・養護教諭コース 1年 大槻 葵

ナゴヤドームでマラソンフェスティバル前日のランナー受付を行いました。出場者が多いため、絶えずランナーが来て終始あわただしかったです。8～10人のグループで活動しましたが、私のグループには主婦やサラリーマン、40～60代の方が多く、幅広い年代の人たちと関わることができました。活動の途中で何回も話し合いをして、どうしたらランナーがスムーズに受付できるか考えて実行し、とても有意義な時間になりました。臨時でグループリーダーを任されましたが、周りの人たちにサポートして頂きやりきれてうれしかったです。マラソンフェスティバルの雰囲気がキラキラしていて素敵でした。

3) ボランティア要請件数と派遣件数

(1) 年度別ボランティア要請件数と派遣件数

センター開設時（2014年7月）から2017年1月末までに学外から頂いたボランティア要請件数と、その要請に応じて派遣できた件数を表5に示す。2014年度は46件の、2015年度は95件の、2016年度は65件のボランティア要請を頂いた。学生をキャンパス外へ出すに際して、安全で安心できる活動先としたいとの思いから、私的なものは避け、まずは市町、官公庁、公益法人などとするを前提としたが、これだけのボランティア要請を頂き、心から感謝しています。

表5 年度別ボランティア依頼件数と派遣件数

	2014年度(7.2~3.31)		2015年度(4.1~3.31)		2016年度(4.1~1.31)	
	要請	派遣	要請	派遣	要請	派遣
市町	17	3	48	16	29	12
官公庁	4	2	9	5	7	3
協定機関	1	1	0	0	1	0
公益法人	15	2	17	4	18	1
社会福祉法人	3	0	4	2	2	1
NPO	3	0	8	4	3	3
NGO	1	0	0	0	0	0
企業					2	1
大学	0	0	4	3	3	3
一般	2	2	2	1	0	0
その他	0	0	3	3	0	0
合計	46	10	95	38	65	24

図12は、市町+官公庁(1群)、協定機関+公益法人+社会福祉法人(2群)、NPO+NGO(3群)、企業+大学+一般+その他(4群)に分類し、それぞれの群ごとに過去3年間のボランティア要請件数を示したものである。SLセンターが受け入れ対象としてお願いしている市町や公共性のある施設からのボランティア要請件数が多いことが分かる。

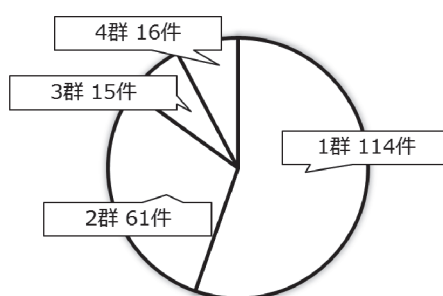


図12 ボランティア要請先分布

このようなボランティア要請に対して、2014年から2016年までの全ての年度において、派遣できた割合は半分以下であった（図13）。

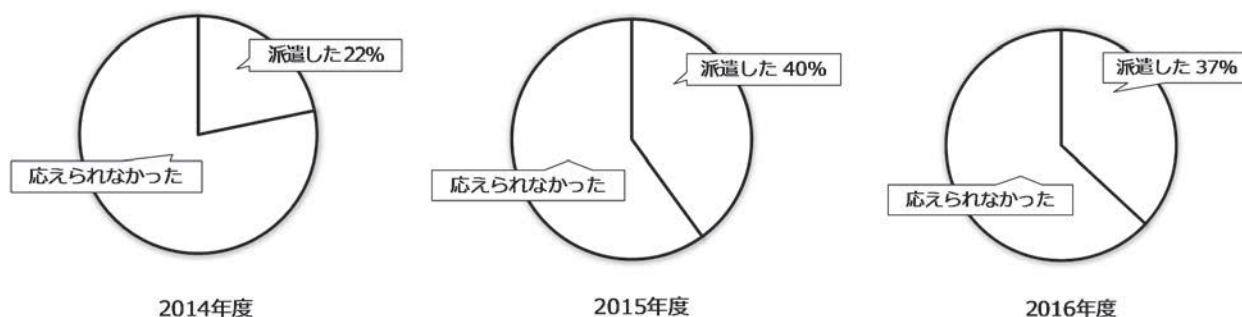


図13 派遣できた割合

2016年度のボランティア要請のうち、応えられなかった主な理由は、スポーツ関連のボランティアであったこと（14件）、多治見市や幸田町、知多郡など大学から遠いボランティア先であったこと（5件）、平日の授業日やテスト期間中に開催されたボランティアであったこと（2件）、意見交換会や討論会などのボランティアであったこと（2件）であった。

（2）派遣要請にお応えできたSLの内容と件数

SL要請を頂き、それにお応えできたSLの内容を表6-1～6-3に示す。どの年度においても、子どもと接するボランティアや障がい者と接するボランティアは学生受けし、ついでイベントや祭りの運営などを学生は好んで参加しているように思われる。

表 6-1 派遣できたボランティアの内容と件数（2014 年度）

種類	内容
イベント・祭りの運営 (4件)	愛知なごや雪まつり
	国際交流フェスタ
	第32回全国都市緑化あいちフェア
	第2回スペシャルオリンピックス日本 東海・北信越ブロック夏季ブロック大会 in 愛知における競技の準備や誘導、各ブース販売や着ぐるみ担当など
学生企画及び運営 (3件)	にっしん市民活動祭実行委員
	竹の山学童保育所「たけのこクラブ」のクリスマス会企画・参加
	たけのこキッズ子ども会の“新入生歓迎会”
学部・学科の専門知識を活かす	外国人向け防災テキスト用イラスト作成
復興インターン	2014年度春期“復興インターン”石巻市・亘理町・山元町・女川町

表 6-2 派遣できたボランティアの内容と件数（2015 年度）

種類	内容
障がい者と接する (7 件)	心身障害児・者の子を持つ親の“クリスマス会”（話し相手やゲームの手伝い）
	ローゼンレクミーティング 2016 東郷町（障がい児と遊べるイベントの運営）
	避難所体験（障がい者の避難について考えるイベントの運営）
	スペシャルオリンピックス日本・愛知“サマースポーツキャンプ 2015” （障がい者と 2 泊 3 日のキャンプ）
	SON・愛知 2016 絵画教室（障がい者と一緒に絵を描く）
	特別養護老人ホーム“秋祭り”（模擬店の簡単な調理）
	障がい者支援施設でのお祭り（出店のお手伝い）
イベント・祭りの運営 (7 件)	長久手市民まつりで餅つき
	あいちトリエンナーレ 2016
	あいち国際女性映画祭 2015（会場運営）
	第 27 回 全国スイーツマラソン（イベントの運営）
	マラソンフェスティバルナゴヤ・愛知 2016 （ランナー受付やコース整理などのイベント運営）
	愛知駅伝 10 周年記念 ごちラン（イベントの運営）
	tea party の運営
子どもと接する (6 件)	しめ縄作り（地域の子どもや保護者にしめ縄の作り方を教える）
	子ども会（クリスマス企画実施）
	トワイライトスクール・トワイライトルームにおける学生ボランティア ふれあいフレンドにおける不登校児童生徒支援ボランティア
	東郷町“3 歳児健診時の親子遊び”（3 歳時の健診待合時に折り紙を使い遊ぶ）
	日進市サマースクール（夏休みに小学生の宿題をみたり、一緒に遊ぶ）
	2015 年度伊那谷こども村“サマーキャンプ” （子どもと一緒にキャンプしながら遊ぶ）
学部・学科の専門知識を活かす (5 件)	日進市市民活動祭で P V 編集
	にっしん市民活動祭“にっしんまるごとカレー選手権”のレシピ作成
	荻浜仮設住宅における食事提供 2015 年度夏期
	荻浜仮設住宅における食事提供 2015 年度春期
その他 (4 件)	豊明市“男女共同参画イラスト”のデザイン作成
	小学校での防音作業（障がい児のために教室で防音対策をする）
	防災訓練でのハイゼックスを使った災害食づくり
	国立長寿医療研究センター
学生企画及び運営 (2 件)	フォトラリーをしながら豊田市で活躍する N P O 団体のブースを回る
	2015 年度 竹の山夏まつり実行委員 竹の山学童保育“たけのこクラブ”クリスマス会 企画・実施 （保護者と話し合い企画する）
復興インターン	2015 年度夏期“復興支援インターン”石巻市・南三陸町・気仙沼市”

表 6-3 派遣できたボランティアの内容と件数（2016 年度）

種類	内容
障がい者と接する (6件)	コロニー祭（模擬店の手伝い）
	名東区社会福祉協議会“ふれあい交流会” （障害のある子どもたちと、運動や工作）
	名東区役所主催“名東ふれあいスポーツ広場”（会場設営や競技・点字の補助）
	心身障害児・者の子を持つ親の“クリスマス会”（話し相手やゲームの手伝い）
	名古屋グランパス&SON・愛知 サッカー教室 （障がい者の方とミニゲームを楽しむ）
	障害者支援施設夢の家“夢まつり” （障がい者や地域の人が参加するお祭り内で屋台の手伝い）
イベント・祭りの運営 (6件)	あいちトリエンナーレ2016
	愛フェス2016（運営・補助）
	餅つきボランティア（餅つきと餅の配布）
	マラソンフェスティバルナゴヤ・愛知2017
	ぎふ清流ハーフマラソン2017
	tea party の運営
子どもと接する (4件)	徳川美術館（夏休みこども歴史教室で指導と解説）
	しめ縄作り（地域の子どもや保護者にしめ縄の作り方を教える）
	長久手市小学校（宿題をみる・遊ぶ）
	日進市子どもまつりボランティア（お祭り内で子どもと接するイベントに参加）
学部・学科の専門知識を活かす (3件)	荻浜仮設住宅における食事提供 2016年度夏期
	荻浜仮設住宅における食事提供 2016年度春期
	デンソー緑のプロジェクト“みつばちプロ”のはちみつを使ったレシピを作成 （商店街で販売）
学生企画及び運営 (2件)	2016年度 竹の山夏まつり実行委員
	農林水産省 東海農政局（長期に渡り食育を広めるイベントを企画・開催）
復興インターン (2件)	大学間連携災害ボランティアネットワーク（漁業支援活動）
	復興・創生インターン（石巻市で企業インターン）
清掃活動	やろまいか！ 愛・地クリーン作戦！！

4) SLセンター主催講習会

(1) 講習会の内容

SLセンターでは、学生へのボランティア活動の紹介のみならず、学生個人の資質の向上についても考慮しており、地域で行われている資格支援活動の紹介もHPで積極的に行っている。HPには、「イベント・講座・講習会」の項目を設けて支援している。

SL活動を通して多くの人に出会いの中で学ぶためには、ヒューマンケアを考慮する必要がある。緊急性を要する事態が発生した際、人命救助が出来る素地作りとして、SLセンターでは赤十字救急法をはじめとする資格支援も行っている。

活動として社会福祉分野の高齢者のボランティアを行いたい学生には健康生活支援講習を、子どものボランティアを行いたい学生には幼児安全法を、広くボランティアを行いたい学生には救急法をと、ボランティア内容に対応した資格支援を行っている。講習内容を表7に示す。

表7 種々赤十字講習会の内容

講習名		短期講習	養成講習
救急法	日程	90分	3日間 9:00~17:00
	内容	一次救命処置（心肺蘇生法、AEDを用いた除細動、気道異物除去）	傷病者の観察の仕方及び一次救命処置（心肺蘇生、AEDを用いた除細動、気道異物除去）等救急法の基礎知識+急病の手当、けがの手当（止血法、包帯法、固定法）、搬送法及び救護
	交付証	修了者に受講証	修了者に受講証 検定合格者に赤十字救急法救急員認定証
	費用	無料	3200円（資料等）
健康生活支援講習	日程	90分	2日間 9:00~17:00
	内容	避難所における高齢者支援	健康増進や介護予防などの知識、高齢者に多い事故の予防と手当、地域で行う高齢者に役立つ知識・技術、自立に向けての介護の仕方
	交付証	修了者に受講証	修了者に受講証 検定合格者に赤十字健康生活支援講習支援員認定証
	費用	無料	900円（資料等）
幼児安全法	日程	90分	3日間 9:30~16:30
	内容	小児・乳児の心肺蘇生とAEDの使い方、身近なものをを使った応急手当	こどもの事故と予防、乳児・幼児の心肺蘇生、子どもの病気と看病
	交付証	修了者に受講証	修了者に受講証 検定合格者に赤十字幼児安全法支援員認定証
	費用	無料	1800円（資料等）

(2) 講習会の開催日時と受講者

2015年度および2016年度に開講した講習会の開催日時および受講者数を表8に示す。

表8 開催日時および受講者数

		短期講習会日程及び受講者数	養成講習会日程及び受講者数
2015年度	救急法	6月27日(土) 5限 5名	2016年 3月29日(火)～31日(木) 9:00～17:00 14名
		29日(月) 5限 23名	
		12月19日(土) 5限 15名	
		21日(月) 5限 13名	
健康生活 支援講習	7月4日(土) 1限 5名	/	
	6日(月) 5限 44名		
	11月28日(土) 1限 0名		
	30日(月) 5限 2名		
2016年度	救急法	6月27日(月) 5限 20名	9月13日(火)～15日(木) 9:00～17:00 19名
		7月5日(火) 5限 10名	3月23日(木)～24日(金) 9:00～17:00 10名
	幼児安全法	11月7日(月) 5限 2名 人数が規定数より少なかったため未開講	3月29日(水)～31日(金) 9:30～16:30 20名

(3) 学部別受講学生数

ヒューマンケア学部と管理栄養学部のカリキュラムには、応急手当てを行うための授業科目が設置されていることより、受講生は期待していたよりも少なかった。残念なことに、何よりも受講して欲しいメディア造形学部生は殆ど見当たらなかった（表 9）。

表 9 学部学科学年別講習会参加者数

2017年1月31日時点

学部	学科	学年	2015年度	2016年度
管理栄養学部	管理栄養学科	4年生	0	1
		3年生	56	24
		2年生	20	7
		1年生	3	10
ヒューマンケア学部	子どもケア学科	4年生	0	0
		3年生	2	10
		2年生	7	0
		1年生	32	23
メディア造形学部	映像メディア学科	4年生	0	0
		3年生	2	0
		2年生	0	0
		1年生	2	0
	デザイン学科	1～4年生	0	0
	ファッション学科	1～4年生	0	0
短期大学部	現代総合学科	1～2年生	0	0
		合計	124名	75名

5) 復興支援活動

(1) 復興支援インターン、復興・創生インターンおよび夏ボラとは

- 復興支援インターンとは、全国の大学生が宮城県内の被災企業や事業所で職業体験等を行い、被災地産業、被災地域全体の魅力、復興の現状・課題等を学び、参加学生はそれぞれの体験をもとに全国各地への情報発信等の取り組みを行うプログラムである。

本学から 2015 年春期（2～3 月）10 名・2015 年夏期（8～9 月）11 名・2016 年春期（2～3 月）10 名が参加した（表 10）。

- 復興・創生インターンとは、平成 25 年度から平成 27 年度にかけて実施した「復興支援インターン」を、平成 28 年度から内容をより充実させ、「復興・創生インターン」として実施した復興庁主催のプログラムである。その目的は、参加学生が、被災地企業での就業体験等

を通じ、キャリア観を形成し問題解決能力を向上するとともに、地元根付いた団体のコーディネートによって、被災地の魅力を感じてもらうことを目的とする。また、受入れ企業が、参加学生の受入れを通じ、インターンシップの受入れプログラムの充実、人材獲得及び育成、雇用管理の改善等に取り組むことで、被災地域を「実践型インターンシップ」の先進地域とすることである。

本学から2016年夏（8～9月）2名の学生が参加した（表11）。

- 夏ボラとは、“会いに行く、「夏ボラ」。”をテーマとし、東北学院大学学生の企画によるボランティアで、東北学院大学災害ボランティアステーションからの連絡により、本学の学生が参加した復興支援活動である（表12）。

表10 復興支援インターン参加状況

	亘理町・山元町	石巻市	南三陸町	気仙沼市	参加人数
2015年春期	夢いちごの郷 3名	木の屋石巻水産 3名 (株)ヤマトミ 4名	—	—	10名
2015年夏期	—	木の屋石巻水産 4名	(株)カネキ 吉田商店 4名	(株)加和喜フーズ (株)かわむら 3名	11名
2016年春期	—	立町復興ふれあい 商店街 2名	(株)カネキ 吉田商店 4名	(株)中華高橋水産 4名	10名

表11 復興・創生インターン参加状況

	石巻市	女川町	気仙沼市	参加人数
2016年夏期	(株)ヤマトミ 2名	—	—	2名

表12 夏ボラ参加状況

	亘理町・山元町	牡鹿半島	雄勝町	気仙沼市	参加人数
2016年夏期	—	—	—	漁業支援活動他 1名	1名

(2) 復興支援インターンと復興・創生インターンおよび夏ボラ報告会開催実績

インターンや夏ボラ参加に際して、事前連絡会、事前学習会を実施し、ボランティアに参加するにあたっての注意事項、保険加入、緊急連絡先の確認をし、災害・復興の様子、現地の気候、産業、

方言などを調べ学習するとともに、同時期に他地域へ参加する学生との学び合い・共有を行った。

参加後は、センターでの報告会、課題提出、学内外での報告発表会を実施し、この地域での情報発信の場とした。活動内容は、学生各自が現地で行った課題を報告するとともに、各クール 2 枚のパネルの作成・展示を行うとともに、PP を作成し報告会を実施した（表 13）。

パネル（後掲の資料参照）は、本学メディア造形学部デザイン学科助手の西野圭一郎氏のご助力によりできたものであることを付記する。

学内外での報告会は、学生・教職員、地域の方々にご参加いただいた。さらに、合同祭や地域での防災行事や自治会の祭りで、お世話になった企業の商品を取り寄せて販売するなどした。収益は全て、日本赤十字社愛知県支部へ義援金とした。3 回の総額は、47,573 円となった。

表 13 報告会実績

日時	場所	対象	その他
2014 年度春期復興支援インターン 2015 年 4 月 24 日（金）13:00～	名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館 5 階 多目的教室	三大学関係者	企画展
5 月 13 日（水）13:10～	本学 HC206	ヒューマンケア学部学生	
5 月 27 日（水）13:10～	本学 E33	管理栄養学部	
6 月 7 日（日）9:00～	日進市立南小学校 体育館	一般市民	日進市防災訓練
2015 年度夏期復興支援インターン 10 月 28 日（水）17:15～	本学 E33	管理栄養学部学生	
11 月 1 日（日）10:00～	日進市立赤池小学校 体育館	一般市民	日進市地域合同 総合防災訓練
11 月 3 日（祝）10:00～	岩崎公民館	一般市民	岩崎町防災訓練
11 月 11 日（水）13:10～	本学 HC206	ヒューマンケア学部学生	
11 月 29 日（日）9:00～	日進市立竹の山小学校 運動場	一般市民	竹の山自治会地区 防災訓練
12 月 5 日（土）9:00～	市民会館	一般市民	市民活動祭
2016 年 1 月 23 日（土）10:00～	市民会館	一般市民	地域防災リーダー 研修会
2015 年度春期復興支援インターン 5 月 11 日（水）13:10～	本学 E33	管理栄養学部学生	
5 月 18 日（水）13:10～	本学 HC206	ヒューマンケア学部学生	
5 月 25 日（水）13:10～	本学 MA303	メディア造形学部学生	

2016年度夏期 復興支援インターン、 復興・創生インターン、 夏ボラ合同 2016年11月3日(祝) 9:00~	岩崎公民館	一般市民	岩崎防災訓練
11月13日(日) 10:00~	愛知県防災フェスタ	一般市民	モリコロパーク
11月27日(日) 10:00~	岩崎公民館	一般市民	岩崎防災訓練

4. SL 活動の単位認定

2015 年度に管理栄養学部のカリキュラム改訂がなされ、2015 年度入学生からボランティア関連科目（食と健康のフィールドワーク）の単位（1 単位）認定が可能になっている。

単位認定要件として、事前・事後学習を含め 30 時間以上の実施となっている。そこで、事前連絡・学習会の内容、現地での 10 日間にわたる活動の詳細な報告書、および事後の学内や市内の防災訓練等での報告会（それに必要なパネル、パワーポイント、発表の原稿の作成を含む）を実施した（報告会実績参照）。

これらより、2016 年夏期復興・創生インターンに参加した管理栄養学科学生 2 名に、初めて単位が認定された。

今後は、各学部でも SL センターを利用しつつ単位認定できるよう、学生の学びになる SL 内容を提供しつつ、教職員はじめ学生の SL センター認知と利用を高めていく必要がある。

5. SL センター運営委員の想い

サービラーニングは博文約礼

管理栄養学部管理栄養学科

安達 内美子

2014年7月にサービラーニングセンターが立ち上がったときから、運営委員をさせていただいています。管理栄養学科の先生方の中で私が長年、運営委員を務めさせていただいている理由は、専門領域が栄養教育学、食生態学であり、実践研究が主であること、青年海外協力隊として派遣経験があり、ボランティアについて多少の理解があることと私なりに考えています。

青年海外協力隊には、管理栄養士として派遣されました。派遣前の技術補完研修で恩師である本学名誉教授の足立己幸先生に『税金を使い、途上国の人々のために行くからには、「途上国で勉強してきます」という甘い考えは許さない』とくぎを刺されたことをよく思い出します。また近年はボランティアとはいえ、管理栄養士という専門職として途上国に行くからには、その国のために活動し、結果を出すことが特に求められています。

大学において、将来の夢に向かって学習中である学生が参加するサービラーニングと、大学を卒業した専門職のボランティアでは、明らかに意味や求められることが異なります。学生が参加する活動は、ボランティアという言葉よりやはりサービラーニングという言葉が適切なのだと思います。学生たちにとって、大学での学びをサービラーニングの場で実践し、学びを自分のものにしていくことは、プロセスよりも結果を強く求められる社会に出ていくためにとても大切です。まさに、「博文約礼」です。「博文約礼」とは論語にある言葉です。孔子は道を求める者(ここでは管理栄養士になることでしょうか)は、広く書物を読んで見識を高め、そうやって得られたものを、礼を基準にまとめ実践することが重要だと言っています。本学のサービラーニングが今後さらに発展し、大学内、地域に根づいていくには、サービラーニングセンターを中心に大学内、学生、地域の皆様のサービラーニングに対する理解を深めていく必要があると思います。

管理栄養学部では2015年度入学生から、“食と健康のフィールドワーク”としてサービラーニングの単位認定を始めました。私自身、今後さらに管理栄養学部教員として、また栄養教育学を担当する者として、学生たちに実践の場で活用できる知識や理論、スキルを習得させていかなければならないと思っています。

サービラーニングに参加する学生には、学ぶ意識を持って積極的に取り組んでほしいと思います。学びを意識しないと、達成感は得られるかもしれませんが、その後につながるより深い新しい学びが得られないのではないのでしょうか。また、積極的に取り組むだけでなく、学ばせてもらっているという謙虚な気持ちも忘れないでほしいと思っています。それが礼を基準にまとめ実践することになると思います。

サービラーニングの場を提供してくださる自治体ならびに団体の方々、活動の場となる地域の皆様には、サービラーニングの趣旨を十分にご理解いただき、学生の成長を温かく見守っていた

だきたいと思います。学生しかできないこと、学びを自分のものにするために学生にやってほしいことがあると思います。その中で地域の皆様自身が、より良い方向に変化していただければいいなあと思います。学生たちが地域で学ぶことの意味は、学生と地域の人々が共に学び合い、地域の持続可能な発展につながるのだと思います。

最後にサービラーニングセンターの一員として、学生たちが地域の中で人々と関わりながら、大学で学んだことを実践し、学びを自分のものにして、自分の道をすすんでいくことができるように、できる限りの支援をしていきたいと思っています。

誰かのためになることが、あなたのためになりますように

— サービラーニングセンターとエピファニー —

ヒューマンケア学部子どもケア学科

石垣 儀郎

時を経て、なお消えることのないエピファニー「劇的な体験」、震災の記憶。人生を根幹から変えてしまい、揺るがす出来事。

過ぎし日の出来事を現在にとどめ、未来へとつなぎ残すエピファニー「劇的な体験」、人生の記憶。ボランティアとは、そのようなエピファニーに出会った人々に、生きた証を残す作業。生きることへの支援。生きる喜びと、生きることの大切さに寄り添い残す謙虚な関わり。

人は生きている者たちへ、生きている者だからこそ伝え、つながり、つむぎ合って関わり合う。サービラーニングセンターは、そのような人の想いに寄り添い関わり合う「エピファニー」が集まる場所。

学生が、存在することの意味を知りそこに居ることの意義を学び体験し、人としての在り方を思索する。誰かのためになることが、私のためになることに、気が付き知ることのできる場所。

ヒューマンケア学部の学生は、人との関わりを通して学び、成長する。人に喜ばれることを通して、自分が喜びを感じることに気が付く。乳幼児から、大人までのヒューマンケアを学ぶ学部にあって、サービラーニングセンターでの体験はケアそのものと言えるだろう。保育、社会福祉、教育、及び心理のいずれにも欠かすことのできない「人」と「社会」。その関わりの一断片に、ケアの核心を見ることもできるだろう。

人との出会いは、その形に取り込まれ痕跡も残さずに過ぎ去っているかのように見えてしまう。けれど、その出会いが最後となったならば、形を思い出し痕跡を残すようつとめるだろう。1 つひとつの出会いに対して、この人と会うのは、この人と接するのはこれが最後かもしれない。そのような心もちで人と会うことが出来たなら、形を見失うこともなく、とどめることができるだろう。

時を経てみなければ、気付くことができないかもしれない大切な形をボランティアはもたらしてくれる。人に寄り添い支えようと努めるとき、何ができるかではなく、何をするかを意識する。それは、将来の自分のためとなるだろう。

サービスラーニングセンターは、人の存在を肯定し優しさという勇気をもって自分以外の人に寄り添い、支える力を育てる目的を持っている。生きることの大切さは、誰かに必要とされ、承認されることだけではなく、自分を自身で承認すること。そのような気づきを、人との関わりを通して社会の中で実感する。

ボランティアとは、自分を必要としてくれる人と、自分から「ありがとう」を贈りあう行為であったと、気づくだろう。

サービスラーニングセンターは、これからも人に寄り添いエプファニーを幸福へと誘う力を与えてくれる。

社会との接点を探して

メディア造形学部映像メディア学科

柿沼 岳志

私は映像メディア学科に所属しており、特に映画を中心に研究及び指導にあたっております。平たく言えば創作活動に携わる学生を相手に仕事をしています。そしてその創作活動において最も重要な要素は集団作業と考えています。そしてそれはそのまま「社会」につながっています。

アートは社会にとって直接的な役には立ちません。こんな話があります。神戸の震災の折にある著名なロックバンドが、現地に向かい、熱心に演奏しました。彼らを勇気づけるために。もちろん全ては善意から来たことです。ところが彼らに投げかけられたのは「うるせえんだよ!」「こっちはそれどころじゃないんだ!」という吐き捨てるような言葉でした。(まあ彼らは大変激しいロックバンドで、実際の演奏が物理的にひどくうるさかったということも、多少は関係していたかもしれません)。このエピソードが示すようにアートが実際に<役に立つ>には、ある程度の手続きと配慮が必要とされます。つまり接点を探る、ということです。

極端な言い方をしてしまいますと、教育機関の中で最も重要な課題とは、学生を社会に通用する人間として送り出すことではないかと私は考えます。社会と接点のない制作活動など存在しません。アートもしくは創作活動がどのように社会との接点を持ちうるのか、それを探るのは学生たちにとって、実践的で有効なトレーニングとなるはずで、学生たちと共に取り組んでいきたいと思えます。

「デザイン学生の皆さんへ ボランティア活動とサービスラーニング」

メディア造形学部デザイン学科

中西 正明

デザインはアートではない、とよく言われます。これは、デザインを見せる相手は一般の消費者であり、ひとりよがりな芸術に走ってはいけないといういましめでしょう。

それでは、デザイン学科の学生の皆さんにとって、デザインとは何でしょう？

表面的な形や色だけをおしゃれに見せる事がデザインでしょうか？

フォントをメイリオなどのゴシック系にして、左詰めにして、文字の間を詰めてカーニングすることがデザインでしょうか？

文字を小さくすれば読みにくい代わりに上品に見えますが、それがデザインでしょうか？

それとも、デザインはアートではないと言いながら、素人さんにわからなくてもよく、デザインの専門家などの見る人が見ればわかるものこそが皆さんに求められる本物のデザインなのでしょうか？

インダストリアルデザイナーの草分け、レーモンド・ローウィに「口紅から機関車まで」という著書がありますが、グラフィックから建築まで、だれもが名作と納得するデザインに共通するものは何でしょうか？

日本刀の刀身のような究極の機能美こそがデザインの本質でしょうか？それもあるでしょうが、単なる機能美を超えて、見る人、触れる人、使う人を思わずニヤリとさせる「何か」が名作デザインには共通して存在し、それこそが、皆が認める名作デザインの共通点ではないでしょうか。

デザインとは何か、を良く考え抜いて端的に表現すると、デザイン=人を幸せにすること、ではないでしょうか？

サービスラーニングという言葉は、日本人が勝手に作った英語ではありません。アメリカで学生のボランティア活動を広くこう呼んでいます。定年退職後のベテラン専門家が豊富な知識や技術を無償で提供してワーキングを行うようなボランティア活動のありかたと異なり、学生によるボランティア活動は学生自身の内面的な成長につながるという考えが根本にあります。

本学にも様々なボランティア活動の募集が舞い込んできます。学生によるボランティア活動にも色々あります。単なる片付けや力仕事のお手伝いから、マラソン大会の補助、お年寄りや障害者のサポート、被災地支援、そしてデザインの専門性を活かせるボランティアの募集もあります。

デザイン学生の皆さんにとって、これらのボランティア活動の成果が、直接、就活や就職後の技量の向上に役立つ訳ではありません。

しかし、人間を幸せにするのが本物のデザインなら、皆さんがデザイナーとしての学習や下積みや修行の段階を終えたあとに、本物のデザイナーになるために最も必要なのは、人間としての幅の広さではないでしょうか？

人を幸せにする本物のデザイナーを目指すなら、学生時代のボランティア活動は、人間の幅を広げるのにはうってつけであり、それゆえに世界中でサービスラーニング活動と呼ばれているのです。

芸術家の世界にはゴッホやダリのような強烈な個性の持ち主も芸術の発展のために必要ですが、デザイナーには社会性が欠かせません。デザイン活動で最も重要なのはコミュニケーション能力だからです。サービスラーニング活動はコミュニケーション能力を高める効果があります。

日々、作品製作やポートフォリオの充実に追われるデザイン学生の皆さんには、とてものこと、ボランティア活動までは無理という人も多いでしょう。生活費のためのアルバイトの時間も必要でしょう。それでも、一度、試して欲しいのです。自分自身が一回り大きくなるからです。それがデザイナーとしての将来に必ずプラスになると信じるからです。

相手のあることですから、皆さんが望むような先鋭なデザインはできませんが、公的な実作品を作る良い機会ではあります。ボランティアだからこそ出来るクライアントとの折衝の練習にもなります。

皆さんには、ぜひ、サービスラーニングセンターに登録だけでもして欲しいのです。日進市内のデザイン関連ボランティアとか、皆さんが選んだ分野の募集だけを、皆さん宛てにメールでお知らせします。

サービラーニングとファッション造形学科

メディア造形学部ファッション造形学科

鈴木 康明

サービラーニングとは、単なるボランティア活動ではなく、ボランティア活動を通じて相手を思いやる心を育み参加者自身が、人間として学び大きく成長をしていくことを目標とした体験学習をいう。名古屋学芸大学では、2014年7月にサービラーニングセンターが発足し、現在、2年半が経過しようとしている。ファッション造形学科でも一宮市との共催によるファッションショー、あるいは愛知県警主催の交通安全キャンペーンの一環として反射材ファッションショーの実施等により社会活動に貢献している。ただし、マンツーマンでの奉仕活動ではないため、サービラーニングではなく地域での社会貢献活動の位置づけにとどまっている。

ところで、現在、名古屋学芸大学のサービラーニング登録者数は650名。在籍者に対する学科別登録者の構成比をみると下記のとおりである。残念ながら、ファッション造形学科の登録者数はゼロである。理由としては様々なことが考えられるが、簡単に言うと、ファッションとボランティアは関連性が薄く、ファッションに興味をもって入学してきた学生達にはサービラーニング活動はあまり目に留まらなかったのかもしれない。

・学科別 SL 登録者数

学部	学科	在籍者数(名)	登録者数(名)	構成比(%)
管理栄養	管理栄養	697	340	48.8
ヒューマンケア	ヒューマンケア	938	267	28.5
メディア造形	映像メディア	470	19	4
	デザイン	331	20	6
	ファッション造形	309	0	0
短期大学部	現代総合	71	4	5.6
	合計	2816	650	23

(2017年2月10日現在)

そもそもファッションとは第三者の目を意識する一方で、自分の気持ちを何よりも大切にしてそれを表現する自分よりの活動である。誤解を恐れずに言うと、ファッションは個性を重視する活動、ボランティアは社会性を重視する活動と、活躍する領域に相違が生じる。このような活動領域の違いや価値観の優先順位の相違から、ファッション造形学科学生の登録者数がゼロであるという結果になったものと推察される。もちろん、学科としての対応が積極的でなかったという点も反省すべきと考える

ところで、ファッションは個性を重視するビジネス分野とは言え、グローバル化、情報化、少子高齢化、あるいは格差社会が今後ますます進展することを考えると、ファッションを学ぶ前に、人

間としての生き方あるいは社会との調和などを学ぶことが重要となってきた。どんなに立派なファッションデザイナーやマーチャンダイザー、スタイリストになっても人間として立派でなければ仕事の成功は長続きしない。したがって、学科としてもファッションを教える前に、人間として大きく成長するための社会勉強、あるいは人間教育を強化していかなばならない。したがって、サービラーニングは社会に出るための基礎教育として位置づけ積極的に啓蒙し、多くの学生に学習機会を提供していくべきである。そのためには、今後、履修登録・学科ガイダンスの時間等を利用して、まずは1人でも多くの学生にサービラーニングの趣旨を理解してもらい登録に結び付けていきたい。そして、その後、1人でも多くのボランティア参加者を輩出していきたいと考えている。また、仕組みとしては、現在、メディア造形学部ではサービラーニングの単位認定は行なわれていない。これを、今後学部として単位認定の方向へ働きかけ、多くの学生が参加しやすい環境づくりを整備していきたい。

サービラーニングセンター運営委員として思うこと

短期大学部現代総合学科

伊藤 琴恵

サービラーニングセンター運営委員としての2年間を振り返ってみると、当初、「サービラーニングとは何か。」「サービラーニングセンターとは何をするとところか。」を確認することからの始まりであった。2年間の中で気が付いたことを述べたいと思う。

ボランティアとサービラーニングはどこが違うのかについて考える機会となった。ボランティアは自発的な活動、サービラーニングは教育活動の一環で授業評価を伴うということであれば、ボランティア活動はサービラーニングのひとつのきっかけであり、入り口であるかもしれない。そうであるならば、サービラーニングセンターは学生に対してどのようなサポートが必要であるか。第一に学生の安全を確保しなければならない。これについては、サービラーニングセンターから提供するボランティア先が学生にふさわしいかどうか、その安全と内容の吟味を会議の折に幾度となく行ってきた。今後も継続していくことが大切であると思う。

サービス（奉仕活動）の条件として、地域社会のニーズに対応していること、学校教育課程に統合されていること、市民的責任の育成を目標としていることやラーニング（学習活動）の条件としては、学問的な知識・技能を生かす場面があること、振り返るための十分な時間を保障することを挙げている。(唐木 2007)

これらのことを地域社会で考えるならば、大学の地元での活動を継続して行うことを優先する方が、遠方へ出かけていくよりも時間や費用の面からも無理がなく、振り返るための十分な時間を保障することにもつながると考える。過重なボランティア活動であると振り返りに十分な時間が確保できない。ゆとりを持った活動計画が重要である。また、本学は管理栄養学科、子どもケア学科、映像メディア・デザイン・ファッション造形学科と地域社会のニーズに対応できる特色ある学科が揃っ

ていて、学問的な知識・技能を生かす場が十分にある。学校教育課程については学科単位ではなく、大学全体で規定される必要がある。

市民的責任の育成に関しては、前述の唐木が述べているように、学生自身が社会資源であり、サービスを受ける側ではなくサービスを生産する者となること、援助を受ける側ではなく援助者となること、社会変革のリーダーであることを自覚するよう、大学教育の目標を検討していくことが市民としての自覚を生むと考えられる。

学生によるサービスラーニングをサポートする機関がサービスラーニングセンターであり、ここには教育が存在する。サービスラーニングは教育活動の一環であると位置づけられている。よってボランティア先の斡旋機関であってはならない。それだけに担当する教員は学生やボランティア先に対しての責任は重いものがある。活動そのものより、PDCA であり、振り返りから学ぶことの大きさを認識して学生をサポートする必要がある。そのためには、学生に研修の場を設けることやサービスラーニングセンター専門職員の拡充も望まれる。

SL センターの今後に向けて

ボランティアコーディネーター
石原 貴代

2014年2月SLセンター構想案を作成しました。約2ヶ月かけて案を練りまとめ、20頁ほどに及ぶ構想案には、学生の学びをいかに「整理・発展・熟成させるか」を考えてきました。

SLセンターは、2014年7月に開設され11月にHPの運用が始まり、徐々にですが登録者数・参加者数を増やしてきました。開設から2年半の経過の中で、単位化に向けての動きがあったり、学生自らがHPの検索を行いSL活動に参加したりと、学内のSL活動への理解の動きが進んできています。SLセンターでは、学びの場としてのSL活動を提供できているのかを日々検討しつつ、ご依頼いただける市町へのご挨拶等を重ねている状況ですが、学生のより良い学びを提供できるSLセンターであり続けたいと考えています。

単発の活動に思えるSL活動についても継続することにより、活動に繋がりがみえ、自己教育力の向上が期待できます。そのため、活動経験学生が参加にあたって必要な心構えや準備などを次に活動する学生に伝えることが出来るように育ててほしいと願っており、リーダーシップをとれるボランティアリーダーの育成にも取り組みを広げたいと考えています。それら、学内の学生同士のつながりから一歩進み、地域や社会とつながりを持つSL活動を進めていきたいと思っています。

そのためには、本学のどの学部・学科に所属する学生であっても一つの活動に参加し、目的を一つにし、学部を超えた相互理解と調和を持てるような活動内容が求められます。学生自身が現代の社会的課題を見つけ、「企画、運営と実施、振り返り、新たな課題の発見」と社会的課題の解決に向けてPDCAを実行できるようなSL活動を提供したいと考えています。現代的な社会問題を抱えた方々

と接し、社会背景とともに、ヒューマン理解を進めコミュニケーション能力を高め、学部での学びに新たな視点を得て、卒後にもつながる社会活動に活かすことが出来る活動を学生に紹介出来るように、今後も努力をしていきます。

学生が活動の中から学びを吸収・発揮するには、学生が伸び伸びと活動できる環境が必要であり、それは、学内のみならず学外においても同じであり、活動に参加する学生の安心・安全を図ることは最重要であると考えています。SLセンターでは、安心・安全な活動を目指し、依頼先と顔の見える関係性の構築を行い、非常時においても対応できるようにと新たな視点を加えつつ、考え進めています。

その上で、ボランティアをするということを「手伝い」で終わらせることなく、教育機関としての役割を果たすべくセンター組織・内容の構築に取り組み、学生と学生がつながりを持ち、地域に根差したボランティア活動を中心に、学生の学びを「整理・発展・熟成」できるようなボランティアを学生に紹介・マッチングできるように努めています。

ボランティアは人を育てる場所です。自らがまず勇気を出して一歩を踏み出すことが必要です。学生がその勇気を持てば、「愛される人へ」につながる学びがここにはあると思います。

まだまだ、生まれたばかりのSLセンターではありますが、皆様のお力をお借りしながら、一歩、また一歩と歩を進めてまいりますので、これまでのご支援に感謝しつつも、今後も引き続きご支援賜りたくお願いいたします。

私の考えるサービスラーニング

センター職員
花井 一都子

センターが開設された2014年7月から半年後の12月に職員として就任し、はや2年が経ちました。日々、サービスラーニング(SL)に関心を持つ学生の対応をしていますが、初めてSLをする学生には一人として同じ目的を持った者はいないと感じています。友達と予定が合ったから、就職活動に役立つから、学科の学びを実践できるから、先生に勧められたから、人脈を作りたいから、何か学べそうだから…これらの目的はカウンターを挟んで私が聞き出したものではなく、友達同士の会話の中から聞こえてくるものです。SLは、だれもが各々の目的を持って始めていいものだと思います。なぜなら、体験したすべての事柄が学びや経験となり、またその活動を通して慈愛の心や他人を思いやる心、コミュニケーション力が育つと考えるからです。まだ社会に出ていない学生が地域コミュニティの輪に入ることによって、初めて社会での自分の立ち位置を理解でき、そういったことが自身の成長につながると信じます。SL活動を2回3回繰り返す学生がいる半面、その目的が達成できなかったのか、そもそも目的がなかったのか、1度きりで卒業してしまう学生もまた

数多くいます。

文部科学省発行の『諸外国の初等中等教育』には、労働体験型学習（work-based learning）の一部として SL が位置付けてられています。その印刷物の中には、“事前学習で、自身が学んだ知識や技能を地域のニーズに合わせて適用することを学び、活動終了後の事後学習では、その経験を振り返り、自らの貢献について理解する。”と記されています。1 度きりの SL であっても実践する学生にとって意味あるものにするため、また 2 回 3 回繰り返す学生にとってそれらが関連性のある継続的なものにするためには、事前学習や事後学習が要になるのではないかと考えます。

SL を継続的に行う学生を見ていると、SL の目的がはっきりしており、活動場所の伝統・土地柄を事前に調べているようです。さらに SL 活動中に五感で感じ学んだことの何に心が動いたか、もしくは今後自分にできることは何かなど、その時の経験を次の SL 活動に繋げているようです。これまで学習してきた技能・知識に加え、自分の性格も探り出すことで、自分を見つめなおすことができます。事前学習（目的を持たせる）と事後学習（学びをどう考えるか）は自己分析を促すことから、今後の進学や就職だけでなく人生の選択肢に備える取り組みになると期待されます。それゆえに、事前指導と事後指導を確実に行っていくことが、SL センターの今後の課題と考えます。アルバイトのような単なる労働体験では期待できませんが、継続的な SL 活動によって、社会性、社交性、関係調整力などを磨くことができます。SL とアルバイトの大きな違いは、事前・事後学習の有無だと思います。アルバイトとの差別化を図り、一人でも多くの学生に SL 活動に加わってもらうには、事前・事後学習を介した自己分析の重要性を説くことが必要であり、それは私の役目だと思っています。

管理栄養学部では 2015 年度入学生より、ボランティア関連科目の単位認定が可能になりました。ボランティアとは異なりサービスマーケティングが持つ本来の意味である“事前・事後学習を含み第三者が評価する学校教育の一環”として移行しつつあります。今後、この単位認定が学部ごとに、あるいは全学的に進み、SL の重要性が全学生に浸透することを期待しています。

6. 参考資料

報告会パネル

 **NUAS**
名古屋学芸大学
NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS AND SCIENCES

忘れない! 東日本大震災

「あの日から今」を伝えたい
—宮城県石巻市を中心に—

名 古 屋 学 芸 大 学

平成26年度春期「復興支援インターン*」

夢いちごの郷

名古屋学芸大学管理栄養学部管理栄養学科 3年生

高見華子 武田さやか 竹村春香

1. 活動場所:夢いちごの郷友の会(宮城県亶理郡山元町)

2. 日 程:2015年2月22日(日)~2月28日(土)

1日目:東北学院大学に集合、事前研修(参加目的・目標・取組姿勢の確認、情報発信の方法など)

2日目:語り部(タクシー運転手)による説明と亶理町・山元町の視察、

3日目

↓ :職業体験、(毎晩、宿泊先にて参加者全員で振り返りミーティング)

6日目

7日目:最終報告会、東北学院大学で解散

3. 活動場所および近辺の被災状況について

私たちがお世話になった亶理・山元町は、福島県との県境に近い宮城県南部の農村地帯です(①)。初めて亶理・山元町を訪れたのは2月23日でした。はじめに地元の語り部の方から震災当時のお話をお聞きしながら町内を案内していただきました。その際に訪れたのが中浜小学校です(②)。この小学校は、児童・職員・保護者・町職員・地区民合わせて90名が学校の屋根裏部屋で津波の直撃を回避し、一夜を過ごされたそうです。津波により校舎は全半壊しましたが、全員翌朝自衛隊のヘリで救助されたそうです。実際に津波が到達したとされる高さが校舎に記されていました(③)。山元町にあるJR常磐線の坂元駅も案内していただきました。この坂元駅は、津波により駅のホームは全壊し、JR常磐線は流失したそうです(④)。



4. 夢いちごの郷友の会での職業体験

2月24日からは、実際に職業体験が始まりました。私たちがお世話になった夢いちごの郷友の会は、たくさんの農家があつまって運営している団体なので、いちご農家やりんご農家で職業体験させていただくと同時に、夢いちごの郷の直売所などでお仕事を体験させていただきました。直売所では、山元町の農家の方々が栽培されたさまざまな野菜や果物が販売されており、多くのお客さんにぎわっていました(⑤)。

山元町の名産は、「いちご」と「りんご」と「ほっき貝」です。津波により大きな被害を受けたいちごハウスも今では復興し、たくさんのハウスが並んでいました(⑥)。ハウス内での収穫(⑦)や、商品を入れる箱の組み立ても体験させていただきました(⑧)。りんご農家では、剪定した枝拾いをさせていただきました(⑨)。震災の話だけでなく、農業に関するお話や山元町のお話もたくさん聞かせていただき、亘理・山元町の方々の温かさを感じたインターンとなりました。(⑩)

5. 復興支援インターンを終えて

この復興支援インターンに参加する私たちの目的は、

- ・被災地を自分の目で見ることで、そこから何かを感じ、考えるきっかけにしたい
- ・参加を通して様々な方と関わりたい
- ・テレビや新聞ではあまり報道されなくなった被災地の現状を知りたい /でした。

そのような目的をもって臨んだ今回の復興支援インターンで私達が一番感じたことは、「震災に対する考え方には個人個人で違いがある」ということです。被災地、被災者、復興とは何か？復興支援インターンに参加し、そこに住む方たちと関わることで実際に震災を経験していない私達には気づかされるのがたくさんありました。今回のつながりを大切にしてこれからも私たちにできることを考え行動していきたいと思います。



*復興支援インターンとは

復興庁宮城復興局共催の下、復興大学(事務局:東北学院大学災害ボランティアステーション)が主催する事業で、日本全国の大学生を対象に、被災企業で職業体験を実施し、職業体験を通じて感じ・学んだ被災地及び被災地産業の現状を、全国各地で情報発信することにより、被災地産業の振興や被災地全体の振興に繋げることを目的とするプログラム。平成26年度春期、参加大学:18大学、参加学生:119名。

平成26年度春期「復興支援インターン」 株式会社 木の屋石巻水産

名古屋学芸大学ヒューマンケア学部子どもケア学科 4年生 表側早希 佐々木華香
名古屋学芸大学管理栄養学部管理栄養学科 3年生 長坂郁奈

1. 活動場所:株式会社 木の屋石巻水産(宮城県石巻市魚町)

2. 日程:2015年3月1日(日)~3月7日(土)

1日目:東北学院大学集合、事前研修

(参加目的・目標・取組姿勢の確認、情報発信・ヒアリングの方法など)

2日目:語り部による説明と活動地域の視察、受け入れ企業と対面式、振り返りミーティング

3日目~

~6日目:職業体験、宿泊場所にて参加者全員で振り返りミーティング

7日目:最終報告会、まとめ、解散

3. 活動場所および近辺の被災状況について

①JR石巻駅の周辺は、震災の傷跡が見えず、「思っていたよりも復興が進んでいる」という印象でした。語り部のお話によると、海岸付近は津波の影響を大きく受け、2階へ避難しても津波に飲まれてしまうほどであったそうです。②ここ4年で、瓦礫の撤去は進んでいるようでしたが、建物はほとんど建っておらず、広い荒野のような風景に寂しさを感じました。③海岸付近では、津波により破壊された建物がそのまま残っているところがいくつかあり、震災がどれだけ大きな被害を与えたかを思わせるものでした。



4. 木の屋石巻水産について

私たちがお世話になった木の屋石巻水産は、様々な魚を使って缶詰を作っている水産会社で、品質の良さにこだわり、その日にとれた新鮮な魚を使って缶詰を作っています(④～⑥)。また、鯨の缶詰を扱い、鯨文化の保存と継承を目指しています。大津波により工場が全壊しシンボルの鯨大和煮タンクも被害を受けましたが、ようやく復興しました(⑦)。工場内に多く残っていた泥だらけの缶詰は、社員やボランティアの手でひとつひとつ丁寧に洗浄され各地に配られました。震災で食料が不足しているなか、缶詰は被災者の希望となったことから「希望の缶詰」と呼ばれ、現在も多くの人に愛されています(⑧)。



5. 木の屋石巻水産での職業体験

職業体験の内容

企業説明(概要・経歴・商品・震災時や震災後の状況)、工場見学、職業体験(ラベル貼り・箱作り・商品の梱包)、商品の試食、ヒアリング、交流等

私たちは、商品を段ボール箱に詰めるという梱包作業をさせていただきました(⑨、⑩)。梱包作業においても、商品の扱い方や、間違えなくお客様へ届けるために様々な工夫がなされており、お客様を思う気持ちが伝わってきて、とても素敵な会社だと思いました。また、従業員の方も仲がよく、自分が思ったこと感じたことを上司にはっきり伝えたり、一人一人がどうしたらより効率的に作業ができるかを考えている姿をみて、このような環境で作られるから、品質のよい商品が生まれるのだと実感しました。



6. 復興支援インターンを終えて

東日本大震災から4年という月日が経ちました。メディアでの報道は減少し、人々の記憶や関心は風化しつつあり、被災地の状況はどうなっているのか、復興は進んでいるのか、もう復興は終了したのか……「被災地の今」が見えてきません。そんな中、私たちにできることはなにか、どのような支援が必要とされているのか、実際に現地に赴き、被災地企業でのインターンを通して復興を考える「復興支援インターン」に参加しました。

参加のきっかけは、3人とも「復興の手助けをしたい」という些細な思いでした。しかし、現地に赴き、自分の目で被災地を見たり、語り部から直接お話を聞いたりすることで、被災地の現状を知り、風評被害など未だに解決されていない問題や新たに発生した問題があることなど、多くのことを感じ、学びました。また、インターンを通して、木の屋石巻水産の方々ははじめ多くの現地の方にに関わり、人々の優しさ、温かさにふれて、石巻市の魅力を感じるうちにその思いはどんどん強くなってきました。

今回の活動を通して、復興の第一歩とは、きっと「なにかをしたい」という気持ちを具体的な「形にする」ことなのかもしれないと思いました。そのために、私たちはこれから石巻市の魅力を多くの人に知ってもらい、「石巻市とのつながり」を多くの人にもってもらえるような情報発信を、木の屋石巻水産の商品の紹介を通して行っていきます。

震災で失ったものを完璧に元に戻すことはできません。失ったものを元に戻すだけでなく、未来に向かって変わっていかねばなりません。私たちにできることは、まだまだたくさんあります。被災地の企業の商品を買うという些細なことでもいいのです。あなたの「なにかをしたい」という気持ちを「形にして」みてください。それが、復興の第一歩と考えます。今秋の合同祭で、たくさんの商品を私たちの手で販売する予定です。是非、皆さんの想いを形にして下さい。

平成26年度春期「復興支援インターン」

株式会社 ヤマトミ

名古屋学芸大学管理栄養学部管理栄養学科 3年生 伊藤彩 沖千帆

名古屋学芸大学管理栄養学部管理栄養学科 2年生 神村美帆 河野呼春

1. 活動場所：株式会社 ヤマトミ(宮城県石巻市松並)

2. 日 程： 2015年3月1日(日)～3月7日(土)

1日目：東北学院大学集合、事前研修、オリエンテーション

2日目：活動地域へ移動、語り部・現地視察

3日目

↓ : 職業体験、日々振り返り

6日目

7日目：現地にて体験成果報告会、東北学院大学へ移動、解散

3. 活動場所および近辺の被災状況について

①震災から3カ月たった頃の倉庫の様子です。廃棄商品の中からまだ食べられそうなものは持ち帰って食べていたそうです。②震災の被害が最も大きかった石巻市門脇地区です。この辺りには震災前建物が多かったのですが、津波で全て流されてしまったとのこと。写真中央奥に見えるのは、津波火災が発生し、全焼した門脇小学校です。③この場所はテレビなどにもよくでていた石巻市沿岸部で、たくさんの水産加工会社があったそうですが殆ど消失してしまい、草が生い茂っていました。



4. ヤマトミについて

④水産加工会社である株式会社ヤマトミの本社です。震災時の津波はこの工場の2階部分まで達したとのことです。⑤ヤマトミの第二工場です。本社から徒歩5分ととても近い場所にあり、人員不足のため、従業員は本社と第二工場を頻繁に行き来されておられるそうです。



5. ヤマトミでの職業体験

職業体験では、アナゴのたれ塗り、サバの骨抜き、いかの塩辛づくり等を教えていただきました(⑥、⑦)。また、ヤマトミさんの主力商品であるメサバを試食させていただきましたが、とても食べやすく、美味しかったです(⑧)。食事は、参加者自らが全て用意することになっていましたが、昼食を御馳走して頂きました。被災時の話や世間話など、たくさんのお話をしてくださって、楽しい食事の時間を過ごしました(⑨)。



ヤマトミさんは、企業戦略として今後、介護食を手掛けたいと考えておられ、知識が乏しい私たちですが、現地で夜遅くまで調べ、介護食のプレゼンをしました(⑩)。ヤマトミさんにとても喜んでいただき、嬉しかったです。インターンシップ最終日に各グループで情報発信についてプレゼンしました(⑪)。どのように情報発信するかを考えるのがとても難しかったです。短い時間の発表でしたが、どのグループも素晴らしいプレゼンでした。



6. 復興支援インターンを終えて

この復興支援インターンに参加する私たちの目的は、

- ・ 直接被災地へ行き、現状を見てみたい。
- ・ インターンを通じて企業の方々の力になりたい。
- ・ 自分の目で今の被災地の現状を知りたい。インターンをやったことがなかったため参加してみたい。
- ・ メディアに頼るのではなく、実際に自分自身で見て感じ、東北の現状を知りたい。 /でした。

一緒に働かせていただくことでたくさんコミュニケーションがとれ、人と人とのつながりがとても強く感じられました。また、管理栄養学部で学んだことを生かし、介護食をプレゼンし、とてもいい経験になりました。一方、想像していたように復興は進んでおらず、まだまだ課題がたくさんある、と感じました。しかし、その課題に前向きに取り組まれる姿勢にとっても心打たれました。ヤマトミさんをはじめ、いろいろな経験をさせていただいた東北の方々には、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



平成27年度夏期「復興支援インターン」 株式会社 木の屋石巻水産

名古屋学芸大学管理栄養学部管理栄養学科 3年生 / 伊藤果穂 石川美貴

名古屋学芸大学ヒューマンケア学部子どもケア学科 2年生 / 木村美波 立松朱咲

1. 参加目的: 実際に被災地に赴き、東北の現状を知りたかった。
また、地元でどんな復興活動ができるか学びたかった。

2. 活動場所: 木の屋石巻水産(宮城県石巻市)

3. 日程: 平成27年8月16日(日)～8月22日(土)

1日目: 東北学院大学集合、事前研修・オリエンテーション

2日目: 石巻市内視察(蛇田地区・仮設住宅)・企業との対面式・美里町工場見学

3日目 ラベル貼り・直売所での販売手伝い・試食・販売

↓ 職業体験 社長との対談・直売所で販売の手伝い、復興庁の方たちと懇親会

6日目 副社長との対談・第二工場、onepark(元冷凍庫)見学・質問

7日目: 石巻水産物卸売市場で企業に向けての報告会・東北学院大学へ移動後、解散

4. 活動場所周辺の被災状況

震災時の被害と復旧までかかった時間は沿岸部と内陸部では全く異なっており、内陸部はすでに新しい建物がたくさんあり復興しているのに対して、沿岸部は津波被害を懸念し人が住んではいけな区域があり更地のところもたくさんあります。石巻市の復興状況を示すデータ数値では復旧が終わったように思われますが、住民の生活は震災前とは大きく異なっています。

震災前の石巻市



震災直後の石巻市



(日和山下方が被害の大きかった沿岸部、上方が内陸部)



日和山からみた現在の沿岸部

現在の沿岸部にはたくさんの工場が立て直されているが、道路すら整備されていない更地の区域も見られる。

5. インターン先について

木の屋石巻水産は缶詰をはじめ、干物や佃煮の製造・販売を行っています。石巻工場（魚の下処理）と美里町工場（味付けなどの加工）の2つの工場で製造しています。石巻でとれた水産物を早ければその日のうちに加工しています。また、お客さんと直接関わるイベントを開催し、『かお』の見える会社づくりを心掛けています。

6. 職業体験の内容とそこから学んだこと

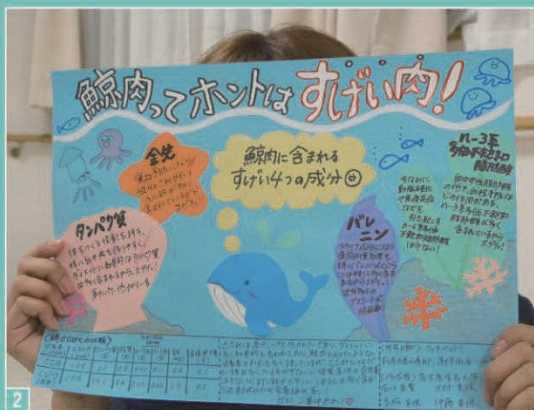
【職業体験】

主にラベル貼りと直売所での販売の手伝いをさせて頂きました。ラベル貼りは、商品名の書いてある短冊に糊付けした後、丸い缶詰に貼っていく作業です。直売所の手伝いは接客、掃除、商品の陳列、在庫確認などをさせて頂きました。

【学んだこと】

これらの活動から、商品になるまでの手作業がとても多いこと、手作業で丁寧に行うことによりまごころも届けられ、さらに品質の向上にも繋がることに気が付きました。また直売所の手伝いより、とてもお客さんを大切にしていること、またそのような関わり方があるからこそ、お客さんとの間に信頼感が生まれことが分かりました。

- ①ラベル貼り
- ②直売所に掲示したポスター
- ③中間報告会の激励に来て頂いた
小泉進次郎前復興大臣政務官
- ④活動報告会



7. 復興支援インターンを終えて

「缶詰を売ってほしい」という一言が、立ち直るきっかけとなったことを従業員の方からお聞きました。震災当時あったいろんな出来事や、人の温かさ、現地でしか知ることができない被災地の本当の姿を知ることができました。

インターンに行くまでは、まだ立ち直っていないのでは、と不安がありました。社長さんや従業員の方々とお話しする中で、皆さんが熱意を持って前向きに働いておられる姿に感動し、こういう企業だから応援したい、商品をみんなに伝えたいと思いました。皆様から心から感謝します。今回の活動を通して震災を乗り越えた強さと人と人との繋がりの温かさを感じました。私たちは震災のことを知り、被災地から学んでいかなければならないと実感しました。

平成27年度夏期「復興支援インターン」 株式会社 カネキ吉田商店

名古屋学芸大学管理栄養学部管理栄養学科

3年生 / 清水温子 森ひろみ 2年生 / 佐野結衣 榛葉智香子

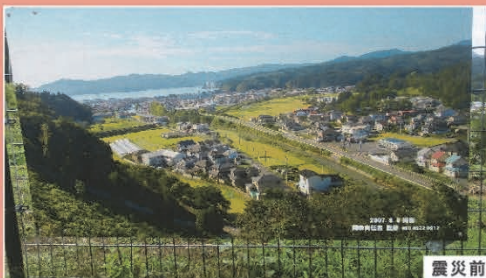
1. 参加目的: 震災から4年半経った今、被災地の現状を自分の目で確かめるとともに、復興に協力したいと思った。

2. 活動場所: 株式会社 カネキ吉田商店 (宮城県本吉郡南三陸町)

3. 日程: 平成27年8月23日(日)～8月30日(日)

- 1日目: 東北学院大学集合、事前研修、オリエンテーション
- 2日目: 仙台市から南三陸町への移動、語り部の話をお聞きしながら現地視察
- 3日目
↓ 工場見学、めかぶのメニュー提案、食べ方提案、試食会
- 6日目
- 7日目: 現地にて体験成果報告会、南三陸さんさん商店街 復興市手伝い、東北学院大学へ移動
- 8日目: 東北学院大学にて事務連絡 解散

4. 活動場所周辺の被災状況



震災前



震災後

震災前後の写真から分かるように、南三陸町のほとんどが津波によって消失した。町民1万人を救ったと言われる命の呼びかけ「津波が来ています。高台に避難してください!」犠牲となった危機管理課の職員(遠藤未希さん、当時24歳)が迫りくる危険を顧みず、必死で呼びかけた防災庁舎。震災の記憶が風化しないようにこのまま残しておきたいと言う町民と、見ると辛くなってしまおう町民もあり、とりあえず宮城県が20年間預かることになっている。

南三陸町には、民宿が数十件あったそうだが今は数件に減り、何よりも心配されているのは、若者の地元離れが後を絶たず、労働力の不足だそうである。



5. インターン先について

カネキ吉田商店が扱っている製品は、めかぶ、うに、鮑、牡蠣である。同社の工場は津波でほとんど流されたが、一つだけ残った。一つでも残ったなら会社を続けると決め、青森県八戸市の工場を借り、中国に社員を派遣してめかぶの手配を始めた。社員の団結力、迅速な行動力の結果、震災1か月後には商品の出荷ができたそうです。

6. 職業体験の内容とそこから学んだこと

【活動内容】

市場に納入する鮮やかな緑色でシャキシャキした食感の「めかぶ」の製造方法（湯通し急冷製法）について詳細に学ばせて頂いた。また私たちが管理栄養士を目指している学生であることから、「めかぶ」を材料とするメニュー開発に挑戦することになった。考えたメニューは下記の5種類である。



- ①めかぶマヨ軍艦
- ②めかぶの白和え
- ③めかぶでふぁっとチヂミ
- ④ふわシャッキだし巻き卵
- ⑤めかぶメガ盛りハンバーグ

- ⑥試作メニュー調理の様子
- ⑦従業員さんによる試食会



【学んだこと】

- めかぶ製品にも様々な製法があること。
- 地元の人々はめかぶをそのまま食べる人が多いが、調理することで新たな美味しさを発見したこと。
- カネキ吉田商店さんの復興に向けた強い思い。 ●南三陸町の人と人とのつながりの強さ。

7. 復興支援インターンを終えて

お世話になった常務の渡辺さんは、「震災直後は現実を受け止めきれない気持ちがあった」と話しておられました。自分を振り立てて仕事に打ち込んだとお聞きし、並々ならぬ努力をされたことが分かりました。またご自身のお住まいも津波の被害に遭い、今も仮設住宅に住まわれていますが、「住めば都」などと笑顔で話してくださり、私達のために辛い記憶を思い出して話してくださっていることに、胸が苦しくなりました。

実際に被災された方から震災の話聞くのは生まれて初めてで、どのような反応をすればよいのわかりませんでした。しかし、最近では震災の事がテレビでも目にしなくなり、あの時の大災害が風化しないようしっかり聞いて、私たち若者がこれから伝えていかなければならないと強く思いました。

1週間という短い間でしたが、南三陸町の良さをたくさん感じる事ができました。またどこへ行っても町の方々が温かく迎えてくださり、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました



報告会ではめかぶを使ったヘルシーメニューを紹介

平成27年度夏期「復興支援インターン」 株式会社 加和喜フーズ・株式会社 かわむら

名古屋学芸大学ヒューマンケア学部子どもケア学科
2年生／大野かおる 金塚彩夏 1年生／川本史歩

1. 参加目的：被災地の現状や魅力を知り、自分の地元で情報発信すること。

2. 活動場所：株式会社 加和喜フーズ 本社砂子加工場（宮城県気仙沼市）
株式会社 かわむら 岩手第二加工場（岩手県陸前高田市）

3. 日 程：平成27年8月30日（日）～9月5日（土）

1日目：東北学院大学集合、事前研修、オリエンテーション

2日目：仙台市から気仙沼市への移動、
語り部の話をお聴きしながら現地視察（①）

3日目

↓ 職業体験、日々の振り返り

6日目

7日目：現地にて体験成果報告会、東北学院大学へ移動、解散



4. 活動場所周辺やインターン先の被災状況

気仙沼市では、死者・行方不明者：1,358名（平成27年7月31日現在）、住宅被害：15,815棟（平成26年3月31日現在）であった。



かわむら気仙沼 ひまわり



加和喜フーズ 岩手営業所

かわむらグループは震災により26施設中22施設が被災したが、現在は23施設が稼働。

5. インターン先の企業について

(株)かわむらの取り扱い商品

- ・乾燥わかめ・塩蔵わかめ
- ・冷凍海藻
- ・わかめ・こんぶの原料



(株)加和喜フーズの取り扱い商品

- ・三陸産生いくら、味付いくら
- ・すじこ醤油漬



6. 職業体験の具体的な内容とそこから学んだこと

【職業体験】

(3日目、4日目) (株)かわむら岩手第二加工場

- めかぶの根切り・パック詰め(②)
- 会社概要説明
- 陸前高田市市内の視察

(5日目、6日目) (株)加和喜フーズ本社砂子加工場

- わかめの原料上げ・計量・選別・箱詰め(③)
- メニュー提案

【学んだこと】

- 自社商品に対しこだわりと自信を持ち、明るく生き生きと活動されていること。
- 工場内は徹底的に衛生管理されていて、衛生に対する意識が高いこと。



7. 復興支援インターンを終えて

従業員さんから震災当時のお話を聞いて、避難訓練や人々の助け合いの重要性を知ることができました。被災した方から直接話を聞くのが初めてだったので、テレビなどで聞くお話よりもより心に残りました。なかには壮絶な体験をされ、一度死ぬ思いをしたからこそ、震災後すぐに前向きになれたとお聞きしました。

復興途中の気仙沼市や陸前高田市の様子を実際に見て、まだまだ復興していないこと、一部の被災者が他の地域に移住されて人口減少や従業員不足などが発生していることがわかりました。

今回のインターンを通して、被災地の現状を知れただけでなく、再度訪れたいと思える場所ができたこと、同じ目標をもった参加者とともに活動ができたこと、自分の成長につながる経験ができたことなど、得るものがとても多く充実した1週間でした。お世話になった気仙沼市や陸前高田市に恩返しができるよう、今後の活動にも力をいれて頑張りたいと思います。ありがとうございました。

平成27年度春期「復興支援インターン」

中華高橋水産

名古屋学芸大学管理栄養学部管理栄養学科

3年生 / 荒川智美 北澤悠 藤田奈々 水谷凧沙

1. 活動場所：中華高橋水産（宮城県気仙沼市）

2. 日程：2016年3月13日（日）～3月19日（土）

1日目：東北学院大学集合、事前研修、オリエンテーション

2日目：気仙沼へ移動、市内視察、市長講話、受入企業と対面式

3日目

↓ 職業体験（サメ肉加工）、課題取組み（サメ料理の提案）、参加者間振り返りミーティング

6日目

7日目：活動報告会、東北学院大学へ移動、活動まとめ、解散

3. 気仙沼市の様子

気仙沼市は津波被害が大きく、被災当時のまま残っている建物から、今も津波の威力が伝わってきます①②。

震災から5年が経ち、商業施設や住宅は一部で新しく建てられていましたが、未だに更地が大部分を占め、道路は盛り土を運ぶトラックが行き交っていました。また、津波対策として、賛否両論あるようですが、海に沿って分厚いコンクリートの防潮堤がつくられていました③。さらに、高台には災害公営住宅が建設されており④、少しずつですが新しい街づくりが始まっていました。



4. インターン先企業

私たちがお世話になった中華高橋水産はフカヒレ加工をしている水産企業で、その加工の全てを企業内で、全工程を手作業で行っていました。加工作業は魚市場でサメのヒレ切を行う1次工程⑤、サメの皮を取り除くスムキ作業～乾燥までの2次工程⑥、原料準備・排翅姿造り・散翅水戻し・製品詰めまでを行う3次工程⑦で行われていました。



5. 職業体験

私たちは、サメ加工作業を体験させていただきました。どの作業もとても手間のかかるものでした。

これまでほとんど口にしたことのないサメ肉は、とても美味しく、食べやすく、食材としていろいろなアレンジができることに気づきました。そこで、「究極サメ料理への挑戦」と名前を付け、サメ肉を使ったメニュー開発に挑みました。コンセプトは、「サメ×名古屋×ヘルシー」。私たちが考案したのは、「なんちゃってひつまぶし⑧、サメ串カツ⑨、軟骨のバリバリサラダ⑩、ヨーグルトのフカヒレソースがけ⑪」です。従業員の方々に試食して頂きましたが⑫、限られた時間で料理を作る難しさと新たな食材を調理する楽しさを知りました。



6. 感想

復興支援インターンに参加しようとした私たちの想いは、次の4つです。

- ・5年経った被災地の状況を、自分の目で確認してみたい。
- ・被災者のお話を、自分の耳で聞いてみたい。
- ・誰かの役に立ちたい。
- ・東北で学んだことをより多くの人に伝えていきたい。

現地に行ってみないと分からないことがいっぱいありました。気仙沼は、人、自然、食材ととても魅力的でした。被災の状況だけでなくこれからの日本のあり方や家族の大切さも学び、復興の課題も見えてきました。

私たちは、震災を決して忘れてはいけない、と強く思いました。また、お世話になった東北の皆さんの、少しでもお役に立ちたいと強く思っています。

中華高橋水産の皆様、気仙沼の皆様、充実した日々をありがとうございました。

平成27年度春期「復興支援インターン」 株式会社 カネキ吉田商店

名古屋学芸大学管理栄養学部管理栄養学科 3年生 / 河原崎友希 齊田さやか
名古屋学芸大学ヒューマンケア学部子どもケア学科 2年生 / 青山彩花 山根愛菜

1. 活動場所：(株)カネキ吉田商店 (宮城県南三陸町)

2. 日程：2016年2月21日(日)～2月27日(土)

- 1日目：東北学院大学集合、事前研修、オリエンテーション
- 2日目：南三陸町へ移動、町内視察、受入企業と対面式
- 3日目
↓ 職業体験、課題取組み(めかぶを使った新メニュー・POP作成)、参加者間振り返りミーティング
- 6日目
- 7日目：活動報告会、東北学院大学へ移動、活動まとめ、解散

3. 南三陸町の様子

南三陸町は未だ更地が広がっており、土地の高さを約10m高くするため、山を切り開きかさ上げ工事を行っていました①。町の職員が町民を守るため最後まで避難を呼び掛けた防災対策庁舎は、鉄骨や階段の手すりがむき出しになり、剥がれ落ちそうな状態で、津波の恐ろしさを物語っていました②。南三陸町から出て行ってしまった人々に戻ってきてほしいという願いのもと、国内外から多くの支援を受けて、南三陸病院が再建されました③④。



4. インターン先企業

カネキ吉田商店は、震災により4つのうちの3つの工場が被災しましたが、残った工場でいち早く活動を再開した企業です。社員が一丸となり、青森県八戸市にある冷凍庫をかりて、原材料を調達し、従業員全員が泊まり込みでめかぶを製造し、震災から約一か月という早さで出荷を始めました⑤。

一番の人気商品のめかぶは、大釜で湯通し、急速に冷却し、水切りをします。沸騰したお湯に通すと、茶褐色のめかぶ⑥が瞬時に鮮やかな緑色に変化します。湯温を細かく管理しながら色ムラが出ないよう手作業で行い、鮮やかな緑色とシャキシャキした食感の湯通しめかぶを作っています。



5. 職業体験

私たちは、めかぶの包装・箱詰め作業、めかぶの新メニュー提案⑦、⑧と子ども向けポップの作成⑨をさせていただきました。⑩、⑪は新メニューの試食会の様子です。

丁寧さと正確さを忘れない製作用業から、商品に対する愛情や敬意、商品を受け取るお客様を思う気持ちを感じました。また、作業をしている皆さんから、めかぶに対するこだわりと愛情を数多くお聞きし、商品への愛情とその芯の通った強い思いから、よい商品ができあがり、お客様に愛されるのだと感じました。



6. 感想

南三陸町に行って、復興というのは長い歳月がかかるのだなと感じました。また、被災者の方々は、一瞬にして全てを失われたにもかかわらず、前を向いてエネルギッシュに生きておられ、私たちの方がたくさんの元気をもらいました。いろいろなお話も伺い、震災を乗り越えたからこそできた絆もある、とお聞きました。

インターン活動を通して、カネキ吉田商店さんの商品に対する熱意をわたしたちはしっかりと受け止め、風評被害からめかぶ自体をあまり口にしない方々をはじめ、たくさんの方々に商品を紹介していきたいと思います。

また、めかぶをきっかけに、自然豊かで新鮮な食材がたくさんある南三陸町にぜひ足を運んでいただきたいと思っています。

平成27年度春期「復興支援インターン」 石巻立町復興ふれあい商店街

名古屋学芸大学メディア造形学部映像メディア学科
2年生 / 半澤奈波 横井友希菜

1. 活動場所：石巻立町復興ふれあい商店街（宮城県石巻市）

2. 日程：2016年2月14日（日）～2月20日（土）

1日目：東北学院大学集合、事前研修、オリエンテーション

2日目：石巻市へ移動、市内視察（市担当者ガイド）、受入企業と対面式

3日目

↓ 職業体験（各店舗販売サポート）、課題取組み（第12回石巻復興フード見本市リポート）、
参加者間振り返りミーティング

6日目

7日目：活動報告会、東北学院大学へ移動、活動まとめ、解散

3. 石巻市の様子

初めて石巻駅付近を見たとき、きれいに整備されており、復興はかなり進んでいると感じました①。
しかし、駅から海の近くへ行くにつれて焼けた家の跡や泥だらけのスリッパが落ちているなど、震災の
爪跡がまだ多く見られました②③。

また商店街の方々とお話しをしていると、月命日の11日が来るたびに当時の事を思い出す、当時の
話はしたくない、という方もおられ、建物などの復興は進んでも、心の復興はまだだと感じました。



石巻市に隣接している女川町にも視察に出かけましたが、復興はまだ進んでいないという現状を
目の当たりにしました④。

4. インターン先企業

石巻駅のすぐそばにある立町復興ふれあい商店街は、石巻商工会議所が民間の駐車場を借り、2011年12月にオープンさせたものです⑤。飲食店や海産物、雑貨や電機屋、スポーツ用品店やパン屋など、もともと市街地にあった21店舗が震災後ここに集まり、営業を始めたものです。数ある商品の中で、私たちがお気に入りの一品は、鯛焼き屋さんで売られている揚げ鯛焼きです。さくさくしていて本当に美味しいです⑥。



5. 職業体験

私たちは各店舗での販売をサポートさせて頂きました⑦⑧。営業終了後の清掃の時などに、震災発生当時の状況を詳しく話してくださる方もいました。参加者振り返りミーティングでは、商店街とは何か、を皆で話し合うとともに、今年の10月で閉じてしまうこの商店街に私たちができることは何かを考えました。



6. 感想

私たちは、石巻という地名を、震災が起こってから初めて知りました。また、石巻については、メディアでたびたび登場する「被災地」というイメージしかありませんでした。しかし今回、復興支援インターンで初めて東北へ行くことにより、石巻には美味しい食べ物がたくさんあること、現地の人々がとても親切で、お互い強い絆で結ばれていることが分かりました。わずか1週間の滞在でしかありませんでしたが、石巻は、また旅行で遊びに来たいと思える町に変わりました。

美味しい海の幸に恵まれている石巻、皆さんもいかがですか。

2016年度夏期 復興・創生 インターン

名古屋学芸大学管理栄養学部管理栄養学科 2年生 / 金子 みなみ
名古屋学芸大学管理栄養学部管理栄養学科 1年生 / 江崎 由依

1 インターン先：株式会社ヤマトミ(宮城県石巻市)

2 実施期間と内容：2016年8月24日(水)～9月2日(金)

- 1日目：石巻駅周辺の街歩き、オリエンテーション、BBQを通して企業・インターン生間の交流
- 2日目：企業でのオリエンテーション、製造作業 / 3日目：製造作業、試食会
- 4日目：石巻・女川ツアー(地域若手との交流会：はまぐり堂、女川駅前商店街など)、前半の振り返り
- 5日目：終日フリー(インターン生間の交流で松島の街歩き)
- 6日目：製造、新商品提案作業
- 7日目 → 9日目：新商品提案作業、中間報告会、新商品の試作
- 10日目：成果発表会：新商品のプレゼン(企業内)、最終報告会



①女川ツアーにて/女川の復興・創生現状を聞く



②ヤマトミ本社工場



③お世話になったヤマトミ社長と社員の千葉さん

3 活動場所及び近辺の被災・復興状況について

- ・がれきは撤去されていた ・浸水地域に家がだんだん建ってきている
- ・海に近い場所は安全のため家を建てずに公園や商店街とすることが決まっている



④日和山からの景色/
津波により軒並み家が流されて
しまった



⑤女川の街/
石巻よりもまだ工事中の
ところが多い



⑥女川駅前商店街/
津波で甚大な被害を受けた。
震災後、新しい街創りに取り
組んでいる



⑥石巻はまぐり浜海岸/
はまぐり浜再建に向けて
活動する方の話を聞いた

4 企業の紹介

株式会社ヤマトミは、サバの商品を多く製造しています。工場は二つあり、第一工場では創業当時(平成4年)から変わらずほとんどの工程を手作業で、新しく建てられた第二工場では日本に数台しかない大型の機械を導入して製造作業を行っています。震災後は、新商品の開発に力を入れています。

5 体験の内容

イカやアナゴの下処理、真空包装、梱包作業など製造作業の体験や、新商品の試作・提案など様々なことを体験させていただきました。



⑧新商品提案に向けた試作



⑨ヤマトミの商品を試食



⑩最終報告会

6 インターンの感想

初日はどんな顔をして石巻へ向かえばいいかわからず、不安ばかりでしたが、実際に行くと石巻の方々が温かく迎え入れてくださいました。地元の方はもちろん、震災後に移住してきた人も多くいて、みなさん明るく、コミュニケーションをとっているうちに抱えていた不安もいつの間にか消えていました。ヤマトミも津波で甚大な被害を受け、震災を乗り越えて今があるのだと知り、社長をはじめとするヤマトミの方々の強さに感動しました。ヤマトミでは作業体験だけでなく、新商品の提案も行い、良い経験になりました。また、震災を機に移住してきた方からも多くの話を聞かせていただき、勇気や感動をもらいました。

石巻市の復興創生インターンには全国から学年も学部もバラバラな学生9人が集まり、同じ宿舎で過ごしました。食事を共にしたり、夜中まで語り合ったり、休日には遊びに出かけたりして、たった数日前に初めて会ったとは思えないほど仲が深まりました。また、他企業チームの中間発表、最終発表を聞き、それぞれの学生の能力の高さに驚いたとともに、大きな刺激にもなりました。

大変なこともありましたが、とても充実した10日間でした。参加して本当によかったです。石巻のことが好きになり、また石巻を訪れたいと思いました。

復興・創生 インターンとは

平成25年度から3年間実施した1週間現地に滞在する「復興支援インターン」を、内容をより充実させるため長期間(10日~1か月)現地に滞在する「復興・創生インターン」として平成28年度より開始した。その目的は、①参加学生が、被災地企業での就業体験等を通じ、キャリア観を形成し問題解決能力を向上するとともに、地元へ根付いた団体のコーディネート(石巻市:合同会社巻組)によって、被災地の魅力を感じてもらうこと、②また受入れ企業が参加学生の受入れを通じ、インターンシップの受入れプログラムの充実、人材獲得及び育成、雇用管理の改善等に取り組むことで、被災地域を「実践型インターンシップ」の先進地域とすることである。

2016年度 復興支援活動

夏ボラ

名古屋学芸大学メディア造形学部映像メディア学科 1年生 / 望月 大瑚

1 ボランティア活動先：宮城県気仙沼市

2 日程：2016年8月8日(月)～8月11日(木)

- 1日目：東北学院大学(仙台市)集合、オリエンテーション後、
気仙沼市へ移動、語り部の体験談をお聴きしながら街歩き
- 2日目：気仙沼港で、漁業支援(牡蠣養殖)
- 3日目：気仙沼港で、漁業支援(ホタテ養殖)
- 4日目：唐桑ビジターセンターで津波体験、気仙沼横丁散策、東北学院大学で4日間の振り返り、解散



①1日目のオリエンテーション及び
4日間の詳細と日程確認



②気仙沼市岩井崎の海岸沿い/
当日は台風が近づいており波が高かった



③語り部さんの話をお聴きしながら被害の
大きかった地域の街歩き

3 活動場所周辺の被災状況・復興状況

津波が来た気仙沼市の海岸沿いは瓦礫もほとんど片付けられており、津波によって沈下した地盤を嵩上げる作業に入っていた。海岸沿いに建物はほとんどなかったが、高等学校の跡地には校舎の3階まで津波が押し寄せた校舎が残されており、津波被害の大きさを伺え知ることが出来た。



④語り部さんの当時の震災の話を実際に
聴講している参加者



⑤気仙沼市唐桑町の海岸沿いの町/
震災前は商店などがあつた



⑥気仙沼向洋高校の跡地/
震災の津波は3階にまで到達した

4 ボランティア活動先について

宮城県気仙沼市唐桑町は漁業が盛んであり主にホタテと牡蠣の養殖業を営んでいる。地域の人々の繋がりがとても密である。

5 職業体験内容とそこから学んだこと

【職業体験内容】

牡蠣の養殖に用いる三角の網についた海石やゴミを取り除く作業、牡蠣を養殖するロープの仕掛け作り作業、さらにホタテロープ磨きと養殖ホタテの貝殻へのプラスチック針打ちなどを体験した。

【学んだこと】

「漁業」は船に乗って大きな作業が多いと思っていましたが、実際には細かい作業がとても多いと分かりました。またボランティアという立場で行かせてもらいましたが、逆に支えられ、学ばせてもらっていることがとても多かったです。



⑦岩井崎の現在の街/地震によって沈下した地盤を高くする作業をしている



⑧網についた海石やゴミを取り除く作業



⑨養殖の時に用いるロープの仕掛けを作る作業

6 復興支援活動を終えて

唐桑町で漁業を営む方たちは、震災前後で考え方が大きく変わったと話しておられました。震災前はそれぞれの漁業主さんの間にライバル意識があり、協力したり情報交換したりする事があまりなかったそうです。しかし震災後は、唐桑町の漁業主同士での協力や情報交換をするようになったとの事です。

夏ボラへの参加目的は、今現在の東北の状況を実際に現地に赴き自分の目で見たいという思いでした。震災から5年が経ち、漁業は震災前以上に栄えてきたと聞き、未来に向けて進んでいると感じました。今回は気仙沼市しか見ていませんが、それ以外の東北の場所、特に福島などは震災の傷跡が違うのだと思いました。



⑩牡蠣を養殖する筏(いかだ)/震災後広島の牡蠣漁業の人たちの協力の元作られた



⑪漁業支援1日目でお世話になった鈴木さんと記念写真



⑫漁業支援2日目でお世話になった畠山さんと記念写真

夏ボラとは

夏ボラとは、「会いに行く、「夏ボラ」」をテーマとする東北学院大学学生の企画によるボランティアです。同大学の災害ボランティアステーションからの連絡により、本学学生が参加した復興支援活動です。

2015年(平成27年)4月25日(土曜日) なごや東 22



涙声で被災地の現状を伝える学生＝日進市の名古屋学芸大で

震災被災地 見聞語る

職業体験した名古屋芸大生

東日本大震災の被災が全国の大学生を対象地、宮城県内の企業で職業体験をした名古屋学芸大(日進市)の学生十人は二十四日、大規模で得た情報を現地での活動で報告会を開き、現地の地元で発信することで復興を後押ししてもらった。職業体験は、復興庁

二一三月の七日間、イチゴなど農産物の直売所や缶詰の水産加工会社など三万所に分かれて現地をめぐった。

報告会には学生ら四十人が参加。直売所に関わった三人は、震災で家族を失ったり家を流されたりした現地の学生とも一緒に活動したことを報告した。

「被災地で私たちがしたいことをするだけでは意味がないと突きつけられた。悩みながら継続の重要性を感じた」「このつながりを大切に、私たちにできることを考えて行動を続けたい」などと声を詰まらせながら話した。

報告会は、震災や原発事故を考える同大の企画展の一環。二十九日午後五時十分～六時には、同大図書館で震災に関わりを持つ教員らによるトークライブがある。(並木智子)

なごや東版



心もよう
伊藤 美知代
水彩連盟所属

ニュース、情報は下記へ
社 会 部
052-231-1650・5919
Eメール
shakai@chunichi.co.jp
瀬戸支局 〒489-0809
瀬戸市共栄通4-8
0561-82-3121 Fax 82-5316

中日新聞 2015年(平成27年)4月25日(土曜日) なごや東版

2015年(平成27年)5月26日(火曜日) 中 日 新 聞

復興支援インターンに参加

名古屋学芸大4年 表側早希さん

復興支援インターンとは、全国の大学生が被災企業で職業体験し、学んだことを発信することで、被災地の復興につなげるプロジェクト。

復興支援インターンとは、全国の大学生が被災企業で職業体験し、学んだことを発信することで、被災地の復興につなげるプロジェクト。

復興の第一歩とは、きつと「なにかをしたい」という気持ちをも、具体的な「形にする」ことなのかもしれない。そう感じさせてくれる、貴重な体験となりました。

お断り 「ウチの学食」は休みました。



現地の企業関係者を前に報告する筆者
◎宮城県石巻市で名古屋学芸大提供

学祭で石巻の商品販売へ

私は今回、宮城県石巻市の木の屋石巻水産に受け入れていただきました。商品の梱包作業などを通して、おいしくて品質の良い商品を作るための工夫を知りました。実際に被災地を見たり、直接話を聞いたりすることで、復興がまだ終わっていないことを実感しました。そのような状況にもかかわらず、前向きな石巻の人たちの姿勢には、逆に私が勇気づけられました。

石巻の魅力を多くの人に知ってもらいたいと強く思うようになり、学祭で木の屋石巻水産の商品を販売するため、いま企画を進めています。

中日新聞 2015年(平成27年)5月26日(火曜日) いまドキッ!大学生

復興支援インターンに参加

名古屋学芸大3年
武田さやかさん



宿舎で、参加者(話し合った筆者
(左から2人目)＝宮城県山元
町で(名古屋学芸大提供)

震災の課題について考え、自分の地域で情報発信する復興支援インターンに参加しました。私たちが名古屋学芸大の三人は、宮城県の学生二人とグループとなり、宮城県山元町「夢いち」の郷友の会に約一週間お世話になりました。イチゴとリンゴ農家さんと直売

「自分にできること」見つけたい

所で活動。イチゴの外箱作り、剪定後のリンゴの枝拾いや直売所での販売補助などをしました。活動中は、農家の方から震災当時の話、被災地の現状、被害を受けたからこそ、厳しい意見を聞きました。一緒に活動した宮城県の学生は震災を経験しており、そうではない私たちと感覚が違っていました。話し合いも進まず、悩み、たくさん泣きましたが、山元町の方々は温かく、宮城県の学生とも出会うことができて山元町での毎日が充実していました。だからこそ厳しい意見を聞いた事に感謝し、また山元町に來たいと思うようになりました。「自分たちでできることを見つけたら」。私たちの課題だと思えます。まだなにも始まっていない。私たちの復興支援インターンはこれから

お断り 「ウチの学食」は休みました。

宮城産の魚で介護食

名学芸大生2人 企業と協力、製品化



正式なプレゼンテーションをする神村さん(左端)と河野さん(左から2人目)＝神奈川県内で



2人が提案した介護食

「金華サバ」の認知度も上げた。介護食でみんなに気配を付けた方がいいから、まず変えたいところだ。神村さんは「介護食の知識がないので、まずいこともあったけど、こんな早くみんなに気配を付けた方がいいから、まず変えたいところだ。神村さんは「介護食の知識がないので、まずいこともあったけど、こんな早くみんなに気配を付けた方がいいから、まず変えたいところだ。神村さんは「介護食の知識がないので、まずいこともあったけど、こんな早くみんなに気配を付けた方がいいから、まず変えたいところだ。」

日進市の名古屋学芸大管理栄養学部2年の神村真帆さん(左)と河野真愛さん(右)が、東日本震災で被災した宮城県内の企業と協力して、地元産の魚を使った介護食を企画し、森永乳業グループで製品化されることが決まった。二人は被災地支援の一助となることを期待している。(並木智子)

きっかけは、今年三日間の研修中、関係者の二人には専門分野のため、在学期間が一月、全国の学生が被災から「介護食」を始めたの知識が足りなかり、二人が担当する地の企業で職業体験がないと、アイデアを求められた。どうする復興支援の「めざした」。

「復興支援インターン」は、二年前の先週の社長目録に留まり、に神奈川県内の森永乳業の同業各社の水産加工マを使用したレシピを募集した。マートの関係者も復興に特別に水産品を応援した。今後に改良を加え、森永乳業グループが二〇一六年度の商品化を目指している。

神村さんは「介護食の知識がないので、まずいこともあったけど、こんな早くみんなに気配を付けた方がいいから、まず変えたいところだ。神村さんは「介護食の知識がないので、まずいこともあったけど、こんな早くみんなに気配を付けた方がいいから、まず変えたいところだ。」

カレー選手権を前に準備をする学生ら＝日進市の名古屋学芸大で



日進産の野菜や米を使った各種のカレーを味わえる「日進野菜ごっこカレー選手権」が五日、日進市民会館で開かれる。中心となって企画した名古屋学芸大の学生たちは、日進に住む人たちが「街が活性化することを」にしたいと意気込んでいる。(並木智子)

カレー選手権は、同会館を会場に開かれる「日進市民活動祭」のメイン企画の一つ。活動祭の実行委にボランティアで参加する同大管理栄養学科の学生が考案した、好きな人が多く、レシピも考えやすいカレーになり、多くの人が楽しみたいと考えた。

日進にいたるさまざまな人が協力する形にこだわった。いずれも日進産の米と三種の野菜を使うことなど五つの条件を設けて、市民や学生にレシピを募集。約三十のレシピが集まった。

うち五つを採用し、同大、愛知学院大、飲食店三店舗の五力が調理。食材は、J.A.あいち尾東や地元

日進で5日カレー選手権

農家のグループ「日進野菜研究会」などから購入する。味わった市民らに、人気投票をしてもらい、賞金を決める。

十一月十六日には、名古屋学芸大に学生や飲食関係者が集まり、レシピを選んだり、提供方法話し合ったりした。今後、レシピ考案者と調理側がアレンジを加えるなど完成させていく。

五種類のカレーがセットになり、価格は五百円。午前九時半から券を販売し、同十時半から提供を始める。五百食限定でなくなり次第終了となる。

同大二年の高見華子さん(二)は「市全体を盛り込んで、新しいつながりができる機会になれば」。三年の鈴木りささん(三)も「みんなが一つのものを作り上げたという企画にしたい」と話している。

名学芸大生企画 地元食材5レシピ競う

「本場の味だ」名古屋めし人気

仮設住宅の隅の隅に、仮設住宅の二階建てが建ち、約百五十名ほど住んでいる。名古屋学芸大の学生たちが、仮設住宅の隅の隅に、仮設住宅の二階建てが建ち、約百五十名ほど住んでいる。名古屋学芸大の学生たちが、仮設住宅の隅の隅に、仮設住宅の二階建てが建ち、約百五十名ほど住んでいる。

いまだキッ!大学生

皆さんからの情報や感想を待っています
〒460-8511(名古屋) 中日新聞 教育報道部
☐ youth@chunichi.co.jp



名古屋学芸大栄養学科の学生

被災地和ます出張食堂

東日本大震災で被災した宮城県石巻市秋保の仮設住宅で、名古屋学芸大(愛知県日進市)の学生が住民向けの無償の食堂を2年前から春休みと夏休みの間に開いている。独居の住民やお年寄りが多く、学生による栄養高次の食事が喜ばれている。(藤原啓嗣)



学生は仮設住宅の調理士として、調理師免許を持って、調理士として活動している。調理師免許を持って、調理士として活動している。調理師免許を持って、調理士として活動している。

「本場の味だ」名古屋めし人気

仮設住宅の隅の隅に、仮設住宅の二階建てが建ち、約百五十名ほど住んでいる。名古屋学芸大の学生たちが、仮設住宅の隅の隅に、仮設住宅の二階建てが建ち、約百五十名ほど住んでいる。



仮設住宅の隅の隅に、仮設住宅の二階建てが建ち、約百五十名ほど住んでいる。名古屋学芸大の学生たちが、仮設住宅の隅の隅に、仮設住宅の二階建てが建ち、約百五十名ほど住んでいる。



石巻かほく新聞 2016年(平成28年)8月27日(土曜日)

中日新聞社 2017 (日刊) 3月3日(金曜日) 2017年(平成29年)3月3日(金曜日)

石巻で名古屋学芸大生運営 真心食堂 卒業の春

東日本震災被災地
東大震災6年

一月下旬の石巻市秋保地区、夜が明け始めた午前六時、仮設住宅集会所の入り口、大学の学生が揃って「U.S.A (ユニバーシティ)」と書かれたのれんが掛かった。朝集まった住民たちに、エプロンの学生たちが、「おはようございます」と声を掛けた。

「このメニューはラントレストに書いたり、スマートフォンで、多くの住民が手帳にメモをつけている。学生たちは、午前四時から受付を始めた。

東日本震災では、津波が仮設の五十軒の集落を襲い、大半の家が流失。住民一人分だけになつた。若い世代が市街地へ移り住み、

五十七以上の十八人が十戸の仮設住宅に帰った。住民の岡部正志さん(五十)は、「久しぶりだね。何がしたいか、何があるか」と尋ねた。活動は、管理栄養部の田村明教授が震災後に被災者を訪ねたことがきっかけ。

「温かい食事も、皆さんが少して体で感じるようにして、初めて集まり、高台に新しい住宅が完成し、今年夏頃から移転が本格化する。四月までの店じまいを済ませた。一年の尾聲、沙由美さん(三十九)は、「前向きな姿勢で住民の方から学ぶことは多い。後輩たちも支援にぜひ来てほしい」と話す。

住民らは交流の継続を願う。訪れた学生の写真をアルバムに収めている岡部さん(五十)も、「学生さんには私の集会所も使ってもらえるように話して心が通じ合っただけ、元気をもらった。高台に移って、いつかでも遊びに来てほしい」と話している。

が、震災後の特別抗害で、それの死因は、木曾川事

中日新聞社
発行所 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-8511 電話 052(201)8811

2017年(平成29年)
3月3日(金)

スマホで便利
中日新聞プラス
登録の期間、合わせては
0120-664411

中日新聞 2017年(平成29年)3月3日(金曜日)

ウムを開いた。県内の災害想定を基に、事業の再開、継続のポイント、復興の過程で地域に期待される協同組合の役割について考えた。

三重大学の青木雅生准教授が「自然災害にみる協同の力」と題し、基調講演をした。「防災には

情報発信に 学生の視点

東海農政局



朝市会場に設置した東海農政局「移動消費者の部屋」で、クイズを担当した学生ボランティア

東海農政局(名古屋市中区)は2016年度、名古屋学芸大学(愛知県日進市)と連携して情報

発信の充実を進めている。学生の視点や自由なもの、農政局は学生らの発想を得て、同局の情報提案を受けて、庁舎内な

協議会に、県内の協同組合の連携を強化し、協同組合の社会的・経済的地位の向上を目的としている。県生活協同組合連合会、県漁業協同組合連合会、県労働者福祉協議会、県中小企業団体中央会、JAグループ三重で構成している。



サンフルのカーネーションで、生産者からの質問に答える種苗会社の担当者

どにある情報発信コーナーの運営やイベント時に反映させたい考えた。

この事業には、同大学のサービスマーケティングセンター(ボランティアセクター)に登録している学生ボランティア13人が参加。6月にスタートした。

参加学生らはこれまでグループに分かれ、農政者の部屋では、「わが国の食料自給率」をテーマに見学。庁舎内にある「消費者の部屋」や、施設「オアシス21(同市東区)」に定期的に開かれる「ガニックファーマーズ朝市会場」に設置した「移動消費者の部屋」を複数回、訪れた。「部屋」は消費者との交流へ、農林水産業や食生活を幅広い情報を提供している。

9月中旬の「移動消費者の部屋」では、11月に開く農政局のイベントなどに反映させる予定だ。(あいち)

あゆみ

vol. 01

発行日

平成29年 3月 20日

発行者

名古屋学芸大学・名古屋学芸大学短期大学部サービスラーニングセンター
〒470-0196 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57番地

TEL

0561・75・2188(直通)

FAX

0561・75・2188

E-mail

slc_ml@nuas.ac.jp

ホームページ

<http://slc.nakanishi.ac.jp/>

発行所

株式会社 コームラ

〒501-2517 岐阜市三輪がりんとびあ3

TEL

058・229・5858(代表)

FAX

058・229・6001

SLC

名古屋学芸大学
名古屋学芸大学短期大学部
Service Learning Center

キャンパスを飛び出した学びが、今、始まる。

地域のために

子ども達のために

社会のために

SLC

vol. **01**
あゆみ

SLC

名古屋学芸大学
名古屋学芸大学短期大学部
Service Learning Center

2017. 3. 20